昭和46年4月11日発行通巻5号(毎日曜日発行) 昭和46年2月5日国鉄首都特別扱承認雑誌第516号

4/11
220円
5

朝日=ラルース

週刊 世界動物百科



朝日新聞社

刊行のことば

1970年代の世界は，科学技術の異常な進歩と豊かな経済発展をとげた半面，人間の幸福とは何かを，あらためて問い直すことを余儀なくされています。この地球上の自然は，現代文明の生んだ公害のために破壊されようとし，動植物はかれらの生息する環境を失いつつあります。動物の一員である人類の運命もまた，この自然環境の崩壊に左右されるでしょう。

この時にあたって，失われようとしている自然と，危機に臨んでいる動物界を，いま一度ふりかえって，認識を新たにすることは，人類にとって無限の意義をもつものと信じます。

生きている動物界の実態を明らかにし，自然への親しみを呼びおこすことは，また人類の未来についての教訓ともなりましょう。

朝日新聞社が，フランスのラルース社と提携して「朝日＝ラルース　世界動物百科」を発刊するのは何よりもこのためであります。

本誌は現在この地球上に生きている動物の生態を，全世界から選んだもっとも美しいカラー写真でとらえながら，動物のなかでいちばん人間と縁の近い哺乳（ほにゅう）類，それも人間の〝親類〟であるサルからはじめ，鳥類，爬虫（はちゅう）類，両生類，魚類，昆虫（こんちゅう）を含む無脊椎（むせきつい）動物の順で紹介していきます。

内容は，高い学問的水準を保ちながら，青少年にも親しめる平易な表現で，生きた動物の姿を興味深く伝えることにつとめました。

とくに日本の読者のためには『私たちの仲間』のページを添えて〝動物週刊誌〟としての内容の充実をはかり，世界と日本の動物界のニュースや話題をおさめました。また日本の第一線動物学者の手により，カラーページを補完する解説と注をつけ，あるいは日本の動物についてのより詳細な紹介を行ないました。

本誌はアイウエオ順に並べるこれまでの〝引く百科〟の観念を大きく打破しました。192 週にわたって楽しく読み進んでいくうちに，おのずから動物についての百科的知識が集積されていく〝読む百科〟として，いつまでも読者の皆さんに親しまれることを期待してやみません。

世界動物百科　第 5 号　4月11日　目次

凡　例

□本文中〔　〕を使ったものは，日本版のために付加した説明である。
□くわしい注釈が必要なものには，その語のあとに〔注1〕と番号を入れ,『私たちの仲間』第27ページに，同番号で記載した。
□動物の種名は，原則として和名（一般に通用している外来語を含む），学名（イタリック）の順で表記した。
和名の多いものについては，併記したものもあるが，専門家と相談のうえ編集部で決定した。
和名のないものは，英名または仏名をカナ書きで入れ，原語（ローマン）を付記した。
□人名，地名は，本人または原地読みを原則としたが，慣用の固定しているものはそれに従った。

本誌の購読について

本誌は，全国の書店，朝日新聞販売店で取り扱っております。

毎週定期的に配達をご希望されるかたは，お近くの，取扱店にお申込み下さい。

なお，本社直接購入のご希望は，下記あてお申込みを願います。送料は，1部につき30円です。

朝日新聞東京本社出版業務部
東京都千代田区有楽町2―3　〒100 TEL 03―212―0131
朝日新聞大阪本社出版業務部
大阪市北区中之島3―3　〒530 TEL 06―231―0131
朝日新聞西部本社販売部出版業務課
北九州市小倉区砂津　〒802 TEL 093―53―1131
朝日新聞名古屋本社販売部出版業務係
名古屋市中区栄1―3―3　〒460 TEL 052―231―8131

次号予告
4月7日発売



世界動物百科
6号　4／18

私たちの仲間

5号………4月11日

トピックス

音響で食欲増進

高知県幡多郡大月町の古満目湾で行なっていたマダイの音響飼育のテスト成績が発表された。

これは昨年10月から県と瀬戸内海栽培漁業協会屋島事業場が中心となり，南西海区水産研究所などが協力して，全国ではじめて実施したものである。

テストの方法は，人工で孵化した稚魚3700匹を網囲いの中に入れ，そこに人工飼料をまく自動給餌機を浮かべる。給餌機の中心には音響発振機が取りつけられており，音響によって食餌時間をおぼえこませ，つねに定量を食べさせて成長を促進させようというものである。

テスト当初の稚魚は平均10.5グラムだったが，最初の1か月間で，平均魚体重は18.7グラム増加し，次の1か月には13.7グラム，次の月には27.7グラムもふえていることがわかった。

ふつう養殖しているマダイは1か月に5グラムほどしかふとらないのでとくに冬場にこれだけの増量をみせたことは音響に誘われてえさを食べたせいだと考えていい。

4月には1匹150グラムぐらいに成長するので，網囲いをはずして湾内に放流する予定だが，放した後も給餌機と音響発振機は残しておいて，定時間に音を出してえさを与えることになっている。■

月よりの使者



写真　オリオンプレス

ムーンキャットというネコ（**上の写真**）をご存じですか。体毛が極端に短く，耳がばかでかい。しっぽは太くて長く，肝心のひげはあるかないかわからないくらいの長さ。

ムーンキャットの子ネコは外側の毛皮が大きすぎるようで，ひどくしわくちゃに見える。

しかし，成長するにしたがって張りのあるからだになっていく。

欧米ではこのネコを，月からやってきた使いというが，性格はかなり気まぐれで飼いにくいネコだ。

ちなみに，ムーン（Moon）には「気違い」という意味もある。■

世界最大の淡水魚



写真　オリオンプレス

ブラジル，リオ・アラゴイアのバナル島で，カラヤ・インディアンの漁師がやっとの思いで陸に引きあげたのはピラルクという魚。（**左の写真**）

目方はなんと181キロで，世界でいちばん大きい淡水魚。アマゾンの動物のなかでも非常に珍しいものだ。■

ぜいたくな〝裸のサル〟

300万部を突破した「裸のサル」をはじめとして，「人間動物園」などで日本の読者にもおなじみになった動物学者デズモンド・モリス氏の近況が知らされてきた。

ベストセラー「裸のサル」は，人間をまったくほかの動物と同じように，動物学的見地からその特性を解明したものだが，この書の背景になったのは，かれのユニークな経歴によるところが多い。

すなわち，オックスフォード大学で動物学を学び，バーミンガム大学で理学博士号を受け，再びオックスフォードで5年間の動物生態学の実習。テレビ会社にはいっては「ズー・タイム」（動物園だより）などを製作，ロンドン動物園の哺乳（ほにゅう）類担当キュレーターをつとめ，前衛芸術の知識を生かして，現代芸術研究所の総支配人の任にもついている。

ここでかれは小野洋子の「ボトム」（人間のヒップばかりを写した映画）を上映したり，ジョン・レノンや，「イージー・ライダー」のデニス・ホッパーとも親しく交際した。

かれの痛烈な文明批判や「裸のサル」の発想は，こうした現代芸術家たちのフィーリングから生まれたものかもしれない。現在のかれは，ロールス・ロイスを乗りまわし，ホアン・ミロの原画を書斎に飾り，マルタ島に別荘をもち，オックスフォードに大邸宅を構えて悠々自適。

「わたしが今しようとしているのは，人間たちに自分がどういう動物であるのか，どういう問題を考えるべきか，について考える人間をつくることだ」といっている。

さしずめかれは〝着飾ったサル〟というところか。■



写真　オリオンプレス

（写真は別荘の庭でのデズモンド・モリス氏）

アマチュアの観察記

野鳥の宝庫といわれる仙台の広瀬川河畔で12年間も野鳥を観察，その報告を「広瀬川地区で確認した野鳥について」と題してまとめた女性がいる。

横田みちさん（56）がその人で，昭和34年以来，広瀬川の牛越橋から評定河原までを足で歩き，自分の目で確認してきたものばかり。ヤマセミ，イワガラス，イワツバメ，カルガモなど96種類の野鳥が生息していることを調べあげた。

横田さんは，子どものときから鳥が大好きだった。山中の渓流にしか生息しないとみられていたヤマセミ（カワセミ科）の巣を，仙台の評定河原で発見した驚きと喜びが，野鳥の実態を調べてみる動機となった。

以来，双眼鏡と望遠鏡を肩に，広瀬川河畔を歩くのが日課となり，その根気のよさが，いつしか広瀬川の野鳥分布図となってきた。

その間も，庭先には巣箱をかけてえさを与えつづけ，スズメ，メジロ，ヒバリなど年間25種類の野鳥が姿を見せるほどで，昭和42年には野鳥保護功績者として，農林大臣表彰を受けている。

現在，広瀬川の野鳥は，シメ，ヒバリ，シジュウカラ，アカハラ，ウグイスなどのほか，チョウゲンボウ（ハヤブサ科），マガモ（ガンカモ科）などの珍しいものまで36科，96種，1亜種がいるが，河川のよごれが目だってくるにしたがって，野鳥の数も減少するという。

この報告のまとめには，東北大抗酸菌病研究所助手の永井彰さん（39）夫妻も協力しているが，仙台市は関係機関に配布，保護に当たりたいといっている。■



蒼竜図　朝鮮三国時代（４～７世紀）の古墳の壁画。
空想の怪獣である竜を描いたものとしては，もっとも古いものの１つ。

もうひとつの世界

特集

怪獣はなぜこわい

グループ・５プラス１

いまや第２のブームだそうだが，ここ数年間巨大な怪獣がテレビや映画のＳＦ番組で全盛をきわめている。怪獣番組に登場した怪獣たちは，火を吹き，放射能をまき散らし，マッハで空を飛ぶ。われわれのように常識的な動物学を学ぶ者は，かれら怪獣の超能力にただ驚きあわてるばかりで，まったく批判の余地もない。だがそのような怪獣たちを生みだす背後には，人間と動物をつなぐなんらかの心理的なきずなが潜んでいるのかもしれない。

このような超能力怪獣以前にも，たとえばギリシャ神話の怪獣などのように，古代から多くの怪獣が空想されてきた。しかし，空想された怪獣は実在の動物がモデルになっていて，完全に想像だけで生みだされたものはほとんどない。とすれば，怪獣ブーム時代に出現した怪獣も，たぶん実在した動物がモデルになっていると考えてもよいのだろう。

怪獣の分類学

試みに，この怪獣をありあわせの「怪獣図鑑」をひもといて分類してみると，動物分類学的に分類不可能な怪獣はほとんどない。その種類は爬虫（はちゅう）類がもっとも多くて60パーセントを越えている。現在かなり多くの種類の怪獣が出そろっているが，怪獣映画の初期には種類が少なく，90パーセント以上の怪獣が爬虫類に属していた。爬虫類がもっとも多いのは，地質時代の恐竜が，巨大であり，強力であったと考えられる事実のほかに，一種のロマンチシズムをも伴って，われわれのイメージになっているか

——アンケート——
動物に対する恐怖感　%

	きらい	無気味	こわい
脊椎動物			
哺乳類（ゴリラ，トラ ライオンなど）	9.9	8.4	29.9
両生類（イモリ，カエル）	15.6	2.1	1.0
爬虫類融（ヘビ，トカゲ）	4.6	49.7	14.0
魚　類	3.2	0.4	0.4
鳥　類	4.9	6.4	3.5
節足動物			
甲殻類（エビ，カニ）	4.1	1.4	
クモ類	34.3	12.1	
昆虫類（イモムシ，ガなど）	28.9	2.6	
軟体動物（タコ，イカ，貝）	14.4	63	
環形動物（ミミズ，ゴカイ）	35.1	1.4	

らであろう。さらに，その形が内部に人間がはいって操作しやすいという実用性などのつごうもあるかもしれない。

しかし，そればかりでなく，爬虫類は人間が恐れる動物だから怪獣として登場するはめになったのではないだろうか。「怪獣もの」はＳＦ映画というより一種の怪奇・恐怖映画とも考えられる。その作者は怪獣を創造するにあたって，人間の「こわいもの見たさ」の心理を利用して，当然人間がこわがる動物を怪獣にしたてていると考えられる。

それでは，ほんとうに怪獣ものに出演する動物に恐怖感をもつ人が多いのだろうか。ある大学の学生諸君の協力を得てアンケートをとってみると，左表のような結果になり，爬虫類を〝無気味〟と感ずる人がかなり多いことがわかる。このアンケートの結果から，動物は爬虫類のように，われわれにとって〝無気味〟な動物，ゴリラとかライオンのように〝恐ろしい動物〟，その他あまり恐怖感をもたれていない動物の３群に分けられる。

怪獣のモデルになっている動物は，人間にとって無気味な動物である爬虫類がもっとも多く，ゴリラのように力が強く恐ろしい動物がこれにつづいていて，アンケートの結果とかなりの一致点がある。怪獣はわれわれが動物にいだくある種の感情の表われであると考えられる。

爬虫類の怪獣たちも，本来の気味が悪いという恐怖感のほかに，巨大さというもう１つの恐怖の要素をあわせもっていて，驚くべき強力さを誇っている。フグという魚がからだをふくらませるのは，自分を大きく見せることによって他の動物を恐れさせているという話でもわかるように，一般に動物は自分より大きな動物を恐れるといわれている。

相手が巨大であることは，被害を受ける恐怖を感ずることになる。怪獣の巨大



ヒグマの飼育を思い立ったからといって，僕は資料集めに狂奔したわけではなかった。むしろ忘れようと努め，出掛ける前に完成しておかねばならぬ仕事に精を出した。

人と動物——。

その間に越え難い溝があることを強調する人もいるが，僕はどうしてもそう思えなかった。溝はたとえあったとしても浅く，両者の間には，どっしりした共通の基盤があるのではなかろうか。不可思議で魅惑的な生命を持つものとしての……。

ことに乳を吸って育つ哺乳動物になると，その感が深い。最近，より鋭く動物を分析する科学が発達して，動物の行動や脳の生理がこと細かにわかってきた。その成果を読む限りでは，人と動物の距離がぐんと離れたように思える。しかしこれは，科学がより確かな科学の言葉を捜しているために起こる一時的な現象である。嫉妬やはにかみなど，高級な精神作用をつかみだす手だてがないのでプリミティブな面をまず俎上にのぼす，だから距離が強調されるのである。

動物と親しくなって，日一日と会話の量が多くなっていくのを経験された方は，科学の貧しさに立腹されたであろうが，これは科学の罪ではない。生命というものがあまりにも複雑過ぎ，探究のメスをはねとばしてしまうせいである。

では，ヒグマを育てるのに，どんな知識が必要だろうか。

僕の結論は簡単である。もう１人のイノシシに向かって，僕はこう言ったのだ。

「特別な勉強……。必要ないさ。人の子供を立派に育てた経験があれば，それで

ヒグマと2人のイノシシ　4

ヒグマを求めて北海道へ

畑　正憲



綿帽子をかぶった針葉樹林

十分だと思うよ。それは，ちょっとした技術，たとえばお乳の調合や与えるタイミングなどは知っておくに越したことはない。しかし，大切なのは，もっと他のこと。……いたずらをしたら叱るし，共に食い，共によろこぶことさ」

そう胸を張ってはいたが，まったく不安がないわけではなかった。もし傷つけられたらと考えたし，妻をまきぞえにすることになったら，と心配したりした。

その奇妙に複雑な気持に拍車をかけたのが動物好きの仲間たちである。彼らは独得の動物的な勘で僕がたくらんでいることを嗅ぎつけ，集まってはヤジ馬的な放言をした。

「大学の実験林でツキノワグマを飼っていたそうだ。こいつとヒグマの雑種を作ろうとして同じオリに入れた。するとしばらくにらみあって，ウーッ，とか何とかうなっていたが，ヒグマがちょいと前足を動かした。と，ツキノワグマの首が，前にころりと落ちたそうだよ」

と，教育大学を卒業した秋山智弘氏。彼は一時期，大雪でヒグマを追っていた。

他にも，あるわあるわ，ヒグマの話がこれほど多いとは思ってもみなかった。

こわさのあまり下駄を投げたら，それがヒグマの口にピタリとはまって，捕獲されるに至った珍談や，人里で餌を漁っているうちに石油カンが頭にかぶさってのびてしまった綺談が山ほどあった。

「ヒグマといったって，どれもこれも人を襲うわけじゃない。大雪山のレインジャーをしていた太田君は，遇った時，落ち着けと自分をいましめ，三脚を立てて写真を撮影したそうだよ。ま，三脚を立て，標準レンズでヒグマをとったのは太田君だけだがね」

「知床に，金鉱捜しをしている老人がいます。彼はほぼ30年，知床をさまよっていますが無事ですよ。……ええ，もちろんヒグマにはしばしば出遇っています。だけど，不思議そうにながめた後で，くるりと背を向けて去っていくそうです」

これは知床で映画を作っていたNHKの上田ディレクターの話である。

動物好きの仲間たちは，皆一様にさんざヒグマのこわさを強調した後で，

「だけど絶対にうまくいくよ。赤ん坊から育てて，人の気持がわからないわけがない。君たち2人のヒグマ，そのどんべえとやらが手に入るさ」

と言って，高笑いを残して帰っていった。

やがて夜がふけ，居間で顔を合わせるのは2人のイノシシだけである。3匹いるネコはとっくに丸くなって眠っている。

「いい加減なものね」

「彼らのことかい？」

「そうよ。骨だけは拾ってやるとか，どんべえに乗せてくれとか」

「へへへ……」

「乗るのは，わたしとあなただけにしましょうね」

「もちろん，もちろん」

と僕たちは，まだ見ぬヒグマの夢ばかり見ていた。

夜が明けると，読者からの手紙がくる。なかにはわざわざ速達にしてあるので，何事ならんと急いで封を切ると，

「特報！」

と赤インクで大書した下に，4年後の新聞の見出しとことわって，

「かつてゲテモノ食いでも有名であったムツゴロウ氏が，姿を消す。これは，同氏が飼っていたヒグマが，今世紀最大のゲテモノ食いであったため」

とあり，ムツゴロウの串焼きを食べて下痢をしているヒグマの絵がそえてあった。

そこで僕はカンカンになって，返事をしたためなければならなかった。

「ムツゴロウを食べて下痢をするとは何たる思い違いぞ！　ムツゴロウを食べたヒグマは，必ずやノーベル賞をうけるであろう」

それでも不安だった。何か新しいことを始める際の胸さわぎが，どんなに押えようとしても荒れ狂った。

これを鎮めるには，一刻も早く現物にぶつかる他はない。だが，といってヒグマの赤ん坊が手に入るのは3月の中旬である。僕はいらいらしたり，突然陽気になったり繰り返した後で，たまらなくなって旅に出た。どんべえが生まれる北海道をあてもなくさまよってみようと思ったのである。

これが幸運だった。

釧路から大雪まで走ってみようとして，会ったのが山崎実さん。友人から名ガイドだと教えられた通りの人で，北海道について実にくわしい身についた知識を持っていた。長距離の，自動車を使ってのガイドが専門とかで，のべつ走り回っているので情報が正確で実際的だった。

大雪山中の石北峠までは，車で釧路から約6時間の道のりである。その途中，僕が計画を打ち明けると，

「いい人がいます」

山崎さんは車を停め，運転席から身を乗り出した。

「ヒグマが好きで好きで，30年このかたクマとつき合っている人がいます。マミヤさんといいます。……字ですか，間の見る谷，間見谷と書きます。個人でヒグマを飼い，子を生ませたのは彼だけのはずです。わたしは，こんな商売をしていますから，彼とは20年来の友人です。よし，話してみましょう。彼のヒグマを手に入れましょうよ。うまいことに，わたしの義弟が彼のすぐ近くに住んでますから，いつ誕生するか見張らせて，結果をお伝えしますよ」

1月の末であった。暮れやすい北国の太陽は西に傾き，東の空には，満ちようとする月が輝き始めていた。辺りは一面の雪。その上に，尾を長くひいたエゾシカの足跡がたくさんあった。

ひょっとしたら，間見谷さんの赤ん坊がどんべえになるかもしれない。そんな予感がして，僕はぶるぶるっと震えていた。針葉樹がくすんだ緑の上に綿帽子をかぶり，その林の間から青い闇がひたひたと押し寄せ，どんべえとの出会いにふさわしい峠のたたずまいであった。■

さも明らかにこのような恐怖を生みだす効果をもっている。事実，映画やテレビに登場する怪獣が建物や橋などの構造物を破壊するシーンは怪獣ものの見せ場の1つであり，一種の爽快感とともに，ある程度の恐怖感を引き起こしている。

このような巨大さによる恐怖感のほかに，怪獣，とくに爬虫類の怪獣には〝無気味〟さという別種の恐怖感がある。現代の怪獣以前にも，ギリシャ神話や，中国の伝説，わが国の神話伝説などに登場する爬虫類の怪獣がある。現在でも，ネス湖怪獣，シーサーペント（巨大なウミヘビ）などの目撃談が約20か所以上の世界各地から報告されている。この現存するかもしれない怪獣も，雪男などの少数の哺乳（ほにゅう）類と考えられるものをのぞくと，ほとんどが恐竜形，またはヘビ形であり，爬虫類であるようだ。

これらの怪獣が存在するか，しないかは，おもしろい問題である。もし存在しないとすれば，まわりに人がいないような寂しい場所で，何か正体不明の大きなものや長いものが動いているのを見たばあい，爬虫類を恐れる気持から，とっさに恐竜や大きなヘビを想像してしまうのかもしれない。こう考えると，爬虫類は怪獣としてもっともよい条件をそなえているようにみえる。

無気味フィーリングの分析

では，われわれがなぜ爬虫類をもっとも無気味な動物と感じるのだろうか。この答えはかなり困難であり，満足な答えにはならないだろうが，いくつかその原因と考えられることを述べてみよう。第1には，爬虫類の形が，われわれに与える印象である。爬虫類は哺乳類と違って皮膚には毛がなく，ウロコなど冷たいぬるりとした光沢があるので，異質感があり，気味が悪いこと。また，爬虫類の行動が，われわれの意表をついた奇怪な動きをすることなどが考えられる。

動きについての無気味さは，ヘビの「くねくね」とからだ全体を動かす動き方に感じることである。美しいと感じているはずのハクチョウの首の動きが，ふと気味悪く感じられるばあいがあることからも，動きがわれわれの意表をつくことが無気味さの原因の1つであることは明らかである。しかし，ヘビ状のウナギ

→ •



イグアナ　爬虫類は，その無気味さで怪獣のトップ・モデルになった。（アメリカ，サンジエゴ動物園で）　撮影　田中光常

はあまりこわがられてはいない。ウナギは「ぬるり」とした皮膚をもち，ヘビのように「くねくね」動き，よく見ると無気味さを感じてもおかしくない。だが，ウナギはわれわれにとって，食用という理由であまりにも親しまれているので，われわれの感覚の意表をつく行動がないことから，無気味ではないのだろう。

怪獣ブーム時代の怪獣でさえ，同一の怪獣が何回か出演するうちには，人間の味方として行動する役割にまわったりすることもある。なれることが無気味さを打ち消すことになるらしい。小魚を飼っている水槽に，ふつうの魚類とかなり異なった形のチョウザメを入れると，小魚はこわがってすくんでしまうが，2，3日たつとチョウザメのえさまで奪ってしまうほどなれてしまうという。動物の間でもなれるということは，こわさを打ち消すものであるらしい。

われわれ人間がふなれのために，爬虫類の形や行動が気味が悪いという印象をもつなら，爬虫類と人間の間にはなれ親しむことのできない何かの感情があるのかもしれない。その原因の1つは，われわれに感情移入を許さない爬虫類の目であろう。「爬虫類のような無気味な目」という表現は，われわれの感情移入を許さない無表情な爬虫類の目が，われわれを爬虫類になじませない原因の1つであることを示している。

では目の表情とはいったいどんなものなのかという議論をすると，別にもう1章が必要になるほどのテーマとなる。目の表情の要素として気がつくものは，眼球の動き方，涙による目の湿り，まぶたなどの目のまわりの筋肉や皮膚の動きなどがある。爬虫類のまぶたや目のまわりの皮膚，筋肉の構成が，われわれ哺乳類と違っていることが，〝無表情〟に見えてしまう原因の1つではなかろうか。

このほかにも，われわれが爬虫類に親しめない原因があり得る。その1つは，われわれ人間の進化中のできごとである。地質時代の爬虫類全盛期に，哺乳類の祖型が地球上に出現した時代，全盛期の巨大な爬虫類に，霊長類の祖型の動物が捕食された。その記憶が，われわれ霊長類に残っていて，爬虫類に対する恐怖感になったという説である。もしそのような記憶が遺伝的にわれわれの世代まで伝えられることが可能ならば，地質時代のこのようなできごとで，われわれと爬虫類の間に感情のもつれを生ずる可能性はじゅうぶんにある。

現在の生物学の知見によれば，生物の遺伝をつかさどるものはDNA（デオキシリボ核酸）という生物細胞の核内にある物質で，DNAとよく似ていて，たんぱく合成の主役であるRNA（リボ核酸）もまた記憶に関係しているという説がある。とすれば，記憶に用いられたRNAの記憶情報が，遺伝物質のDNAに組みかえられ，古い記憶が遺伝的にわれわれの世代に伝えられる可能性もある。

恐怖の楽しみ

このように地質時代にまでさかのぼらないでも，原人が地球上に出現したころ，巨大な爬虫類が生き残っていて，言い伝えで現代にまで爬虫類への恐怖感を伝えた可能性があるかもしれない。人間出現以前に絶滅したと考えられていた動物が，有名なシーラカンスのように，現代に生きて発見された例もある。有名なネス湖の怪獣がほんとうにいるとすれば，現在でも人間が恐竜を見る可能性すらあることになる。だから氷河期を生きつづけた恐竜があり，有史以前の人間がそれを見て，恐竜の恐怖を言い伝えなかったとは断言できないだろう。

東洋の竜，ヨーロッパのドラゴンなど，明らかに恐竜としか考えられない動物が空想され，古生物学者が化石によって恐竜を再構成する以前から絵になっている。考えてみれば，これは，たんなる古代人の空想だけであるとはいいきれまい。もちろん竜やドラゴン以外に多くの怪物が古代から神話や伝説，壁画上に残されているが，これらの怪物はよく調べてみると実在の動物をモデルにしている。

たとえば，ギリシャ神話の9つの頭をもつヒドラはヘビ，ケンタウロスやペガサスはウマとその他の動物の部分の組み合わせであり，ケートウスはクジラよりもオットセイがモデルであろう。竜についての話は，中国で生まれた方位を示す四獣神の1つである青竜，ギリシャ神話のヘスペリデースの園の火竜，女神アテーナと戦い，フェニキア王の子カドモスに殺された竜など，中世の騎士談をまつまでもなくはなはだ多い。北天に輝く一群の星にも Draco（竜座）の名があるほどで，そのモデルになった動物としては，化石で再構成された恐竜がもっともよいように見える。

中国では古くから化石を竜骨と呼んでいて，化石から恐竜を再構成した可能性もないではない。しかしいくら火薬や紙などを発明した中国文化といえど，「竜」が生みだされる以前に，恐竜を化石によって再構成することが可能であったかどうか。ローマ時代の，ヘスペリデースの園のヘラクレスの浮き彫りにある竜はややヘビに近いし，東洋の初期の竜は胴が短くトカゲ状だが，中世末期には今のヘビ状になっている。もしかすると現在の怪獣と同様に，竜は実在のヘビやトカゲをモデルにしたものかもしれない。

それにしても，竜が恐竜にあまりに似すぎていることを思えば，古代人が見た恐竜が恐怖とともに言い伝えられて，竜やドラゴンになった可能性もあり得るだろう。ともかく現代では爬虫類に対する，このような人間の感情を利用して，空想の怪獣を創作し，それがブラウン管にのってわれわれの家庭にまではいりこみ，おとなから子どもまでを楽しませている。もし竜やドラゴンが，言い伝えでなく，現実のヘビやトカゲから空想して作られた古い時代の怪獣だとしたら，昔の怪獣も，今の怪獣もまったく同じ人間心理のなせるわざであり，怪獣を作りだすことは，有史以来，人間の恐怖感を楽しむ遊びといえるかもしれない。■（Y）

四つの葡萄色の瞳　3

うつむいていつくしむ

江藤　淳

それにしても，イヌを飼う愉しみというのはいったいなんだろう？　それは，ことによると，うつむいていつくしむ生きものが身辺にいることの充足感，といったようなものかも知れない。

ネコは高いところに登ることがあるし，ハツカネズミではのぞきこまなければならない。そこへいくとイヌは，チワワでもグレートデンでも，とにかく少し顔を伏せて，視線を落として見る，というのが，私ども人間にとっての自然の姿勢である。子供に対しても，私どもはこういう姿勢をとるが，子供はやがて大きくなってしまうのに，イヌはいつまでもうつむいて見る場所にいるのである。

鳥の好きな人は，逆に高いところを見上げることが好きであるに違いない。鳥の好きな人とイヌ好きとでは，精神の質までどこか微妙に違うのだろうと思われる。どちらがどうというのではないが，なんだかそんな気がして来るのだ。

そういうわけで，アニイが来てから，私はまたうつむいて可愛がる愉しみを，少しずつ取り戻していった。子イヌというものには，もともとオモチャみたいなところがあるものだが，そのオモチャみたいなアニイが実は生きていて，ネジの力ではなしに生命の力で動いているのだ，と思うと胸がジーンと熱くなって来ることがある。

つまり，私のなかには，なにをというよりこういう小さな生命を，畏れいつくしみたい気持があるらしい。それが，どんなに儚く消えていってしまうかをこの眼で見ているだけに，なおさらそう感じやすいのだろうか。

アニイはそのうちに，タイルや木の床の上に寝そべるのをやめて，じゅうたんの上や座蒲団の上に寝るようになりはじめた。朝食のテーブルのわきに来て，家内と私が食事をしているのを見上げている2つの瞳を，感じることもできるようになった。しかし，そのたびに，家内が気がかりそうにいうのである。

「この子，本当にダーコみたいな可愛い子に育つかしら？」

そういわれてみれば，私も少し不安になって来る。艶々と毛ぶきのいいところはダーキイにまさっているが，頭の形やリップのはりかたがいかにもコッカーで，どこか人間味のあったダーキイとはくらべるべくもないからである。それになにより，瞳の色が違う。ダーキイのはうるんだ葡萄色の優しい瞳だったのに，アニイのは利かぬ気の緑色だ。本当に，この子イヌはうちのイヌらしく育つだろうか？　しかし，私は自分にいいきかせるようにいう。

「大丈夫だよ。ちゃんと育つさ。ダーコと同じように可愛がってやれば，可愛くなるに決まっているさ。人間だってイヌだって，同じことだ」

「そうかしらね。そうなるのかしらね」

「そりやそうさ。決まってらあ」

だが私は，また不安になりはじめている。そして，その不安を打ち消すように，うつむいてアニイの小さな頭を見ている。……　■

テナガザル科　*Hylobatidae*

テナガザルは，その前肢（ぜんし）が非常に長くて，立ちあがったままでも地面に届くほどだ。この特徴は，他のサル類には見られない。

テナガザル *Hylobates* はアジア，もっと正確にいうとインドシナとスンダ列島（インドネシア）にすんでいる。〔注1〕

身長は1メートル以下，胸部は発達していて厚い。それにもかかわらず，すらりと見えるのは，腰がグレーハウンド犬のようにしまっているからである。後肢（こうし）は前肢より短く，頭部は小さく楕円形で，目鼻だちは人間によく似ている。臀部（でんぶ）には小さなたこがあり，尾は見えない。毛は絹のように柔らかで，黒，茶，灰かっ色，もしくはわらのような黄色である。

形態的にみても，軽快な木登りの名人だということがわかる。がんじょうでしなやかな後肢を使って，危険な跳躍をもする。そんなとき，とても届きそうにないような枝をなんの苦もなくつかむのは，前肢が非常に長いからである。

その前肢がどんなに長いかということは，ヒトの腕とくらべてみればすぐわかる。両腕を水平に伸ばして，その指先から指先までの長さは，ヒトの場合にはほぼ身長に等しいが，テナガザルの場合には身長の2倍もある。ヒ



シロテテナガザル。
青空を背景に枝から枝へと大きくジャンプする。
10メートルくらいは，軽くとぶから
それは〝跳ぶ〟というより
まさに〝飛ぶ〟の感じである。

PH. OKAPIA



トの腕は，立ったままで指の先がひざまで届くというのはまずないが，テナガザルの場合には，指で自分のくるぶしに簡単にさわることができる。明らかに，このように長い腕は，歩くのにはむしろじゃまなのである。

しかしこの腕は，木登りにはたいへん便利だ。こんなに前肢が長いので，どんなテナガザルでも，地上を歩くときにはよちよちからだをゆすり，両腕を左右にひろげてからだの平衡をとりながら，後肢でようやく前に進む。けれども木の上で，よじ登ったり，とんだり，遊び戯れたりするときには，驚くような敏しょうさを発揮する。その身のこなしは，まるで，重力の法則を無視しているようにさえ見える。

フクロテナガザル

Symphalangus syndactylus

テナガザル科のなかで，もっともよく知られている種の１つである。成長すると身長は１メートルになる。毛は黒く，スマトラやマレー半島の森林にすんでいる。このサルは，



シロテテナガザル。
両手を交互に使いながら
丸太を利用して移動しているところ。
非常に身軽で，すばやい動きである。（上）
PH. LAUROS-DEVEZ

クロテナガザル。仙人のような
白いほおひげで，木の枝に腰かけているさまは
まるで，もの思いにふけっているかのようだ。
この種は，タイとベトナムの森林に
かなりたくさんすんでいる。（下）
PH. LENARS-ATLAS-PHOTO

これに近い種にもない，独特の特徴をそなえているが，それは，足の第2指と第3指の間にある膜と，大きくふくらむ喉頭嚢（こうとうのう）〔注2〕とである。

デュボゼルによると「このサルは，1頭のリーダーが導く，遊動する集団をつくって生活している，とマレー人たちはいっている。この集団はたえず移動していて，幼いものやけがをしたものを，置き去りにしていくことがよくある。

しかし，雌が自分の子を見捨てるということはめったになく，どんな敵に対しても，たけだけしいうなり声をあげ，喉頭嚢をふくらませながら，両腕をひろげて自分の子どもを守ろうとする。母性愛は，危険な場合にだけ高められるのではない。母親が子どものからだを洗ってやっている光景は，いつ見てもなかなか感動的なものである。母親は子どもたちを川のほとりに連れていって，泣くのもかまわず水につける〔注3〕。そして，それから注意してからだをかわかしてやる」

フクロからしぼり出す声

フクロテナガザルは，姿を見るよりもその声だけを聞くことのほうが多い。夜明けや夕暮れには，耳を聾せんばかりの大きな叫び声をあげるので，数キロも離れたところにいるわれわれにも聞こえるほどである。わっと号泣するようなその叫び声は，昔われわれがラジオを調整したときの騒音に似ている。

あの偉大な動物観察者ベネットが，しばらくの間自分で飼っていた1頭のフクロテナガザルを観察した結果，そのサルが不安なときには，くちびるをすぼめて喉頭嚢をふくらませ，一息にしわがれ声を出すということがわかった。こんなやり方でフクロテナガザルは，自分の感情を表現するのだ。

ベネットは，生きているフクロテナガザルをヨーロッパに連れていこうとした。航海の間，サルはみんなから好感をもたれて，じきにみんなに慣れた。乗組員にはあいそうがよく，なかでも，あるパプア人の少女と仲良しになって，少女のそばにいては首に抱きついて，お菓子をもらおうとした。サルはどんなことでもよく見ていた。そして，あたりのできごとをもっと よく見ようとして，船のマストによじ登り，索具のところでじっと下を見おろしていた。

性質は移り気だった。おこっているときは，まるでだだっ子のようで，手にしたものをなんでも下に投げつけ，のどを鳴らしていらだたしい気持を表わした。少しでも欲求が満たされないと，すぐにいらいらした。そういうときには，まず息づかいが荒くなり，陰気になって，おこった鳴き声を発し，自分が不満に思っている相手を，おびやかそうとするのだった。

H.O.フォーブスは，木から落ちた幼いフクロテナガザルと，猟師の殺したその母ザルをもらったことがあった。

「わたしはそれをすぐ飼いならして，たいへんな仲良しになった。その表情は利口そうで，人間に近かった。おりの中に入れておくと悲しがるが，おりから出してやると，すぐに元気を取りもどすのであった。自分に向かって差しだされるものは，なんでもさらっていくが，そのしぐさはなかなか巧妙で，洗練されたものだった。ものを飲むときは，入れ物をくちびるにもっていかずに，手のくぼみに水を注いで，指の間から漏れてくるしずくを吸った。

おとなしくて，愛情が豊かで，よくわたしの首に長い腕でしがみつき，胸に頭を押しつけて，満足そうにのどを鳴らすのであった。夕方，村まで，いつもの散歩に出かけるとき



シロテテナガザルの母と子。
まるでサーカスのブランコ曲芸のようだが
今にも落ちそうな子ザルにとっても
しっかりと枝をにぎっている母ザルにとっても
これは余裕しゃくしゃくの芸なのである。
PH. LAUROS-DEVEZ-ATLAS-PHOTO

には，いっしょに連れていってやった。サルはわたしと並んで，満足そうに片腕をわたしの腕にからめて歩いた。かれにとって，立って歩くのは容易なことではなく，立っているだけでもたいへんな努力をしなければならず平衡を保とうとして，両手を右に左に動かしていた。というのは，頭が重いので前のめりになり，倒れそうになるからである」

ギンイロテナガザル

Hylobates moloch

ギンイロテナガザルはワウワウとも呼ばれ，身長は約90センチ。ジャワの森林にすんでいて，足指に癒合（ゆごう）がないこと，毛の色はフクロテナガザルよりも明るく，白っぽいねずみ色をしていること，この2つの点でフクロテナガザルとは違っている。

その実際を見なくては信じられないほど，ワウワウは敏しょう確実に，竹ざおや木や枝を登り降りする。いきなり枝から枝へ，ときには10メートル以上も離れた枝にとんでいき，そこでさらにはずみをつけて，つづけて3回，4回ととんでいく。まるで放たれた矢か，急降下する鳥のようである。かれは，まるで自分の敏しょうさを楽しんでいるかのようだ。

というのは，わけなく回り道できるところでも，目の前にある障害物を，わざととび越えていくほうが好きだからだ。空中をとんでいる最中に，方向を変えることさえある。まず手近の枝にぶら下がって，そこで何秒間かからだを振ってはずみをつけてから，驚くほど正確に，空中をとんで次の枝につかまる。

この運動を腕わたりという。このようにしてかれは，生活の大部分の時間をとんで過ごしているのである。ワウワウは，水を飲むときにしか地上に降りてこない。のどのかわきをいやすと，すばやく樹上にもどる。樹上にいればこそ敵からのがれることができるし，思うさま動きまわれるからだ。

このサルを野生のまま観察することは，かなりむずかしい。というのは，人を避けているし，森のなかのあき地などには出てこようとはしないからである。

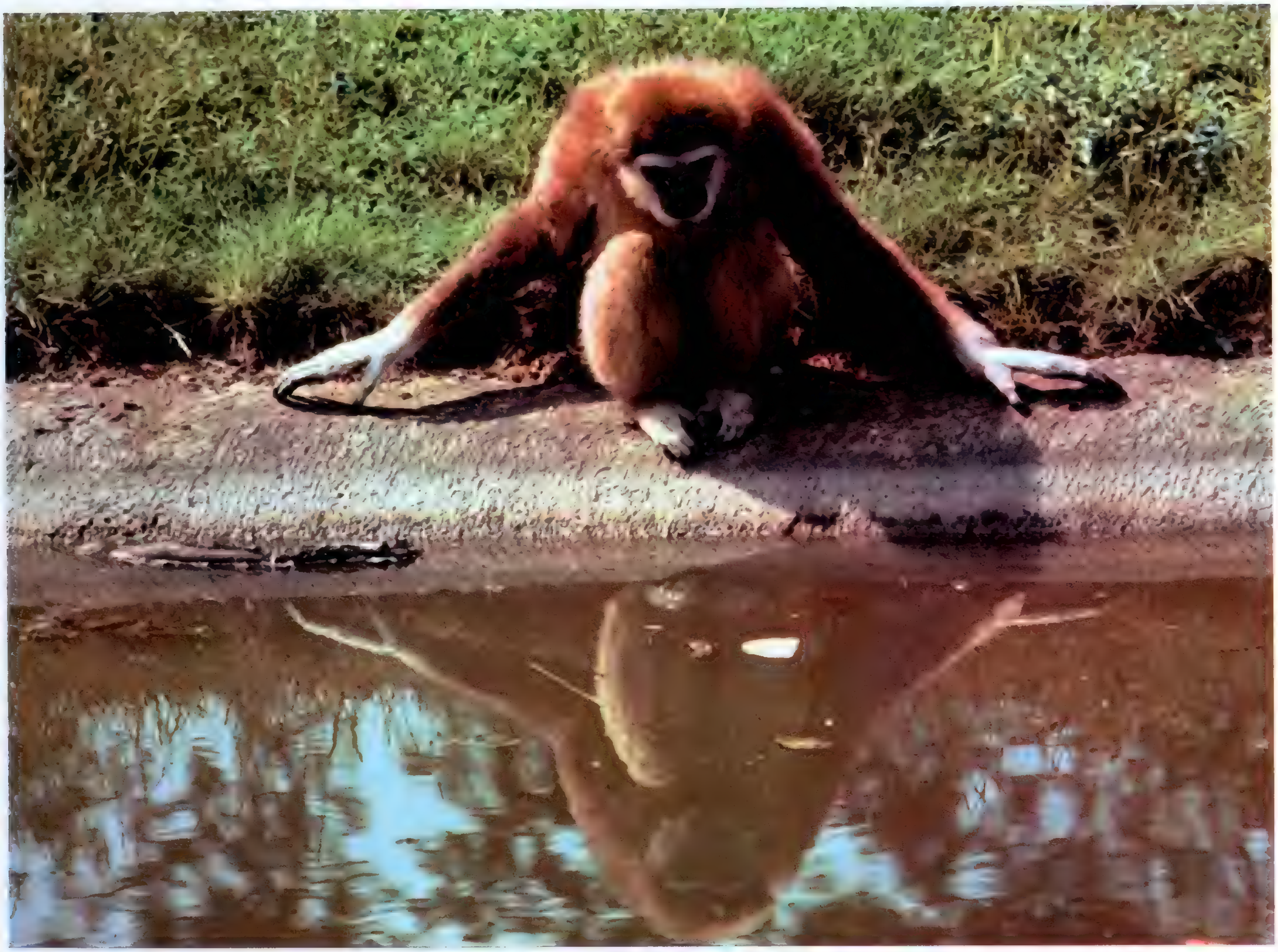
しかし，かれらのみごとな空中曲芸を見物したければ，テナガザルを飼っている動物園にいけばよい。すばやく確実に，枝から枝へととび移るこの空中曲芸師にくらべれば，人間の空中ブランコの天才的名人でさえ，顔色なしであろう。人間の場合とは違って，ぶら下がるにも，また，からだをゆすって次の跳躍にそなえるのにも，片手だけでじゅうぶん



フクロテナガサル。
スマトラとマレー半島の森林にすみ
朝に夕に，異様な鳴き声をたてとびまわる。
その特徴である大きな喉頭嚢が
のどのところに見られる。

PH. RUSS-KINNE

5−4







シロテテナガザル。
水の面に映る自分の姿に見とれている。(上)
PH. W. SUSCITZKY

シロテテナガザル。
樹上では身軽だが
地上では長い手でバランスをとりながら
このように、ぎごちなく歩く。(左下)
PH. PALNIC-THOMPSON

緑色の地域はテナガザルの分布域である。
インドシナ半島、マレー半島、ボルネオ
ジャワ、スマトラなどがふくまれる。
しかし、フクロテナガザルは
マレー半島とスマトラにしかいない。



なのである。そのときかれらは，おちついた平気な顔でからだをぴんと伸ばし，脚(あし)は曲げるか，だらんと伸ばしている。この空中曲芸が，テナガザルにとっては生きがいなのであり，それはちょうど，ウマがうれしそうに野原を走りまわるのと同じである。

ときたま，この空中曲芸が中断されることがある。サルたちは，あるものは片手で木の枝にぶら下がったまま，またあるものは地上や枝の上で，じっと動かぬ像のようになる。そんなときには，何かを観察したり，ようすをうかがっているのだ。それから合図でも受けたように，突然に再びとびかい始めて，空中にみごとなアラベスク（からくさ）模様を描きだし，空間をわがものにするのである。

ときたまあるのだが，かれらのなかの1頭が，他の仲間に不満をいだいているようなばあい，不満をいだくサルは，いかにも年とった男のように，ひとりで小刻みに歩いていく。このとき，サーカスの綱渡りが平衡棒をもつように，両腕を左右にひんと伸ばしている。

フーロック
Hylobates hoolock

フーロックは，ワウワウに近い種である。フーロックは，前額部に帯のような白い毛があるだけで，あとはまっ黒だ。ビルマ北部と，インド北東部のアッサム地方の森林にすんでいる。フーロックについてはすぐれた資料がある。フーロックは低い山にいるが，それは寒さに弱いからだ。果実や，ある種の草や，細くて柔らかい小枝を食べる。小枝はそのままでなく，芽をかみ砕いてしるを吸うのだ。大好物は昆虫（こんちゅう）で，それとクモも大好きである。また，鳥の巣から卵やひなを盗みだしたり，うまく捕えた小鳥も食べる。

シロテテナガザル
Hylobates lar

シロテテナガザルは旧インドシナ，ビルマ，マレー半島南部にすんでいる。その特徴はひげと手足が白いことで，毛のその他の部分は黒っぽい茶色をしている。〔注４〕

オナガザル上科
Cercopithecoidea

オナガザル上科のサルは，旧大陸の暑い地域ならどこにでもいるが，とくにアジアとアフリカ——サハラ砂ばく東部は例外——に広く分布している。ただしマダガスカルにはいない。オナガザル上科のサルは，あふれるよ

サバンナモンキー。
アフリカの大自然のなかで遊ぶ。
かれらは知能が高く，活発で
群れをつくって生活している。
PH. F. BEL - G. VIENNE - JACANA

うな生活力と知恵をもっている。この上科に属する種は、次のような特徴をもっている。

●体長は、サルの標準からみて小型か中型であり、決して大型ではない（35センチから110センチまで）。

●ヒトと同様、歯は32本。あごの片側で、上下にそれぞれ前から、門歯２／２、犬歯１／１、小臼歯（きゅうし）２／２、大臼歯３／３の順で、奥へ向かって並んでいる。

●鼻づらは突出し、頬袋（ほおぶくろ）がある。〔注５〕

●一般に、前肢（ぜんし）は後肢より短く、蹠行（しょこう）性で、四肢（しし）にはそれぞれ５本の指があり、指には平づめがある。

●臀部（でんぶ）には、いくぶん目だつたこがある（ヒヒはその例である）。

●尾〔注６〕は、おおかたよく発達している——マゴットにだけは尾がない——が、ものをつかむ能力はない。

昼行性で、群れをなしているオナガザル上科のサルは、雑食でなんでも食べるのだが、基本的には植物性の食物を主としている。オナガザル上科には約60の種がふくまれるが、体形や環境や生活様式は非常に異なっている。

あるものは樹上にすみ（コロブス属と多くのオナガザル属のサル）、他のものは地上の生活を好む（マカックやヒヒなど）。ヒマラヤとチベット山中のある種のものは、4000メートル以上もの高いところにすんでいる〔注７〕。オナガザル上科のさまざまな種のなかから、重要な次のものを選んで、研究してみよう。シロクロコロブス、ハヌマンラングール、テングザル、カニクイザル、アカゲザル、マゴット、マンドリル、マントヒヒ、ヒヒ。

シロクロコロブス
Colobus polykomos

シロクロコロブスは、もっとも美しいサルといわれている。エチオピアでこのサルを最初に発見した学者は、探検家のリュッペルであった。かれはこのサルの原地名をそのまま学名にした。だが実は、シロクロコロブスは古代において、すでに知られていたのである。

このサルはまことに華麗で人目を引く。黒いビロードのようなからだのなかに、顔の帯状の白い毛がくっきりと目だつ。同じように白いのは首の両側、こめかみのあたり、あご、のど、わき腹、臀部の毛のない部分のまわり、尾の先端である。わき腹にそってたれ下がっている蓑毛（みのげ）は、ぜいたくなマント



シロクロコロブス。
下のほうの豊かな白いふさ毛は、尾の先のもの。
上半分の白いふさ毛は、わき腹のふさ毛で
もっとも美しいサルといわれている。
この美しい毛皮は、婦人の垂涎（すいぜん）の的である。
PH. J. M. LERNOULD-JACANA

のようである。からだの下面では毛は黒々と輝いて，蓑毛の華麗な白さと，あざやかな対照をなしている。手も顔も黒く，からだの他の部分の色調と実によく調和している。体長は70センチで，尾の長さは先端のふさ状の飾りの部分をのぞいて，約75センチである。

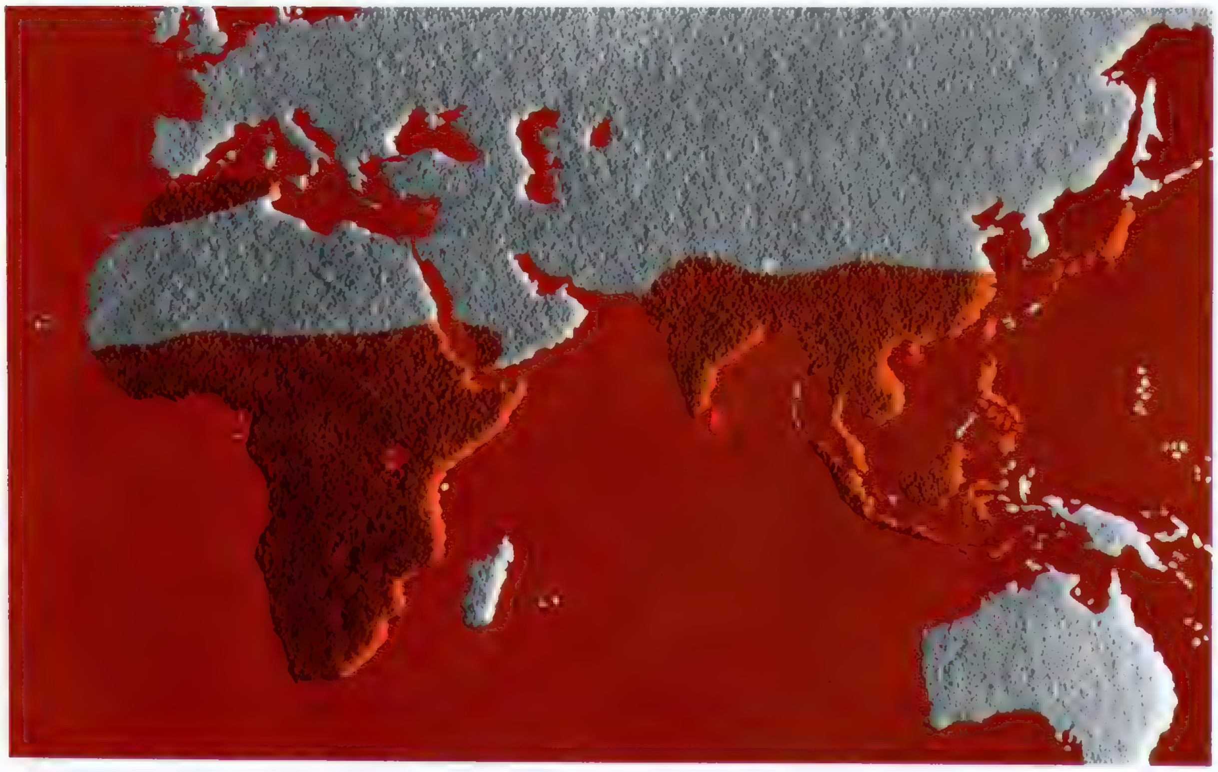
シロクロコロブスは，エチオピアからコンゴ北部，アルバート湖あたりまでのアフリカの森林地帯に分布している。

15頭ないし20頭くらいからなる群れをつくって生活していて，山からくる澄みきった流れの近くにある高い木を，とくに選んですんでいる。またあたりに，大好物のおいしい漿果をつけるネズの木の一種がはえているところが，とくに好きである。

シロクロコロブスは非常に敏しょうで，その動きは的確である。自分に危害が加えられなければ，少しもびくびくしない。何か気にさわることがあると，ネコのように背を丸めてほえたてる。かれらがその美しさを見せるのは，追いかけられているときである。木から木へとび移り，15メートルもある高いところから，落ちるように下降する。そんなとき，その白いマントは後ろになびいて，まるで，砂ばくをいくアラブの騎兵の外套のように見える。

地上に降りてくることは珍しい。必要なものはなんでも木の上にあるからだ。食べ物は，あらゆる樹上生活者の場合と同じように，木の芽，花，葉，漿果，くだもの，昆虫（こんちゅう）などである。アフリカの住民は，大農場や菜園も荒らさないシロクロコロブスを，無害な動物とみている

このサルが，情け容赦もなく狩られた時代があった。というのは，原住民にとってその皮で飾った楯を持っていることが，たいへんな名誉だったからである。エチオピア人や東アフリカの人たちは，シロクロコロブスの背中や，わき腹の皮をかぶせた――昔はレイヨウかカバの皮をかぶせたものなのだが――楕円形の楯を，非常に珍重していた。このサルの尾が，すばらしい装飾となったからである。たった1枚のこのサルの皮が，エチオピアで1ターレルもしたが，1ターレルといえばよく肥えたヒツジ5，6頭が買える値段であった。今日では，幸いなことにシロクロコロブスの皮の商業的価値はほとんど失われてしまっている。〔注8〕



橙色の地域はオナガザル上科のサルの分布域。
非常に広大で，アフリカの北部と南半分の地域
ジブラルタル，インド，セイロン島
中国の一部，および東南アジア，日本などにすむ。

ハヌマンラングール
Presbytis entellus

ハヌマンラングールは，インドでは雌ウシとともに神聖な動物であって，もっともふつうに見られるサルである。インドの人びとから保護され尊敬されているのに乗じて，このサルはふえつづけている。全長は1.6～1.7メートルで，先のほうにふさ飾りのついている非常に長い尾は，そのうちの，80センチを占めている。体重は9キロから11キロである。毛の色は黄色みがかっており，皮膚の透けて見える部分は暗紫色である。顔，手，足は黒く，まゆも黒い。ひげは短く淡い黄色である。

ハヌマンラングールは，インド人の崇拝の対象のなかでも，とくに高い地位を占めていて，遠い古代からこの名誉が与えられている。

古い叙事詩「ラーマーヤナ」によると，巨人ラーバナが，ダシャラタ王の王子ラーマの妻シーターを奪って，セイロン島にある自分の家に連れていった。それをラングールが救いだして，夫のもとへ連れもどした，ということになっている。そのときからというもの，このサルは，神聖な動物であるとみなされているのだ。かれらの知恵と敏しょうさは，いつも人びとの心に強い印象を残してきた。ヒンズー教徒たちは，このサルがマンゴーの実を，あの巨人の園から盗みだしてきたのだと信じている。巨人はこのサルを罰するために，火あぶりの刑にしようとした。ハヌマンラングールは，首尾よく炎を消すことはできたが，そのとき手と顔にやけどをしたので，今でも手と顔が黒くなっているという

聖なるサルの横暴ぶり

ヒンズー教の信者たちが，ハヌマンラングールに対していだいている尊敬の気持は，幾世紀たっても衰えることがなかった。今日でも信者たちは，このサルどもが庭を荒らしても，家の中で気ままに盗みをはたらいても，したいほうだいにさせている。もしだれかが，サルのごきげんをそこなうようなことでもしようものなら，信者たちはたいへん憤慨するのである。

ヒンズー教徒が，ある人に復讐しようと思うときには，ちょうどモンスーンの季節と雨期をひかえたころを見はからって，その人の家の屋根にコメや穀物をまいておく。すると，腹をすかせたサルどもが，屋根の食物に気づいてすぐにとびついていく。そしてしまいには，屋根のすきまにこぼれている穀粒まで拾おうと，かわらをはぎとって屋根をこわしてしまう。おかげでその人の家は，モンスーンの間じゅう，風と雨にさらされっぱなし，ということになるのである。

ヒンズー教徒たちは自分が死んだあと，魂は動物のからだに宿ると信じている。おそらくそうしたことから，動物に対する，とくにハヌマンラングールに対する尊敬の念が生まれるのであろう。この人たちは，このサルが病気になると看病してやるし，またアーメダバードというところには，病気になった動物たちのための病院まで建てられている。

パタス。
このりりしいサルは
アフリカ産のオナガザルのなかでも有名で
毛の色から，レッドモンキーとも呼ばれる。
しかめづらと黒い鼻がかれの特徴である。（右）
PH. J. SIX









テングザル。深山にすむ天狗(てんぐ)にも劣らぬ大きな鼻。樹間を敏しょうにとびまわる身軽さは，まったく天狗そのままだが，見た目よりも，ずっとおとなしい動物だ。

PH. KERN

ハヌマンラングールは，決して罰を受けないという特権を与えられているから，庭を荒らしまわるだけでは足りず，食事のころをねらって家の中にはいりこみ，食事をしている人たちの手から食物をとっていく。けれども，こんな悪い癖をもつにもかかわらず，その性格は穏やかで，人に好感を与える。見ている人はたいてい，かれらの危険きわまる跳躍に圧倒されてしまう。かれらは，とうてい信じられないような速さで木に登り，枝を伝わってすべるように地上に降りてくる。かれらは枝から枝へかなりの距離を一気にとび越えて，一瞬に庭を横切ってしまい，地面にはまったく触れもしないのだ。ちょっとの間，大ぜいで群れていたかと思うと，その群れはあっというまに散ってしまい，また突如として集まって，群れができる。

幼いサルたちの頭はまん丸で，活発な才知を秘めている。かれらはよいものと悪いものとを，すばやく見分けることができるし，また盗癖こそ抜け切れないが，たやすく飼いならすことができる。年をとるにつれて頭が平たくなり，より動物的になっていく。そうなると，ひとり離れて暮らすのを好むようになる〔注9〕。若いころの敏しょうさはいくぶん失うけれども，そのかわり著しい腕力を授かるのだ。老いたサルは，若いサルとは似ていないといってよい。

ハヌマンラングールは，森のなかで群れをつくり，1頭のリーダーに率いられて生活している。かれらが森林から出ていくのは，近くの畑や庭を荒らしにいくときだけだ。ナチュラリストたちや，きわめて信心深い土地の人たちを喜ばせているとはいうものの，要するに有害な動物なのである。かれらを保護しなければならないと信じている民衆の迷信のおかげで，どんどんけたはずれにふえていく。

雄たちはおとなになるか，あるいは他のサルに負かされると，集団のリーダーに追いだされることがある。追いだされた雄は，新しい群れをつくらなければならなくなる。インド人たちの話によると，雄たちの間ではたえず闘争が繰り返されているということだ。

2つの群れがばったり出会うと，ある領地を確保したり，えさ場を奪い取ろうとして，猛烈な戦いを繰りひろげることがよくある。こういった戦いの1つに，マンゴーの小さな林をめぐって行なわれた争奪戦があった。それはこう記録されている。

「まず最初に，両方の群れのなかで強い雄が，敵意をむきだしにして勝負した。そのうちの1頭がのどをかまれて殺されると，味方の群れの雌がたくさん助けに駆けつけて，相手の群れを強引に追っ払い，自分たちの群れを勝利に導いた」〔注10〕

ハヌマンラングールの声はよく響き，とくに朝と夕暮れにはよく聞こえてくる。かれらはおもに2つの音声を使う。1つは，木から木へとび移っているときで，うれしそうな非常に特徴のある声，もう1つは，のどの奥から出るしわがれた不快な音声で，じゃまをされたり，おこったりしたときの音声である。

トラ狩りをする人たちはよく知っているが，第2の叫び声は，野獣のいくさきざきの木の上から必ず聞こえてくる。しかし，このしわがれ声がしたからといって，必ずトラがいると思ってはいけない。驚いたときにもこの音声を出すからである。たとえば，傷ついたシカが逃げるときにこの声を聞いたこともある。また人が近づいてくるのを知らせるためにも，やはりこの声を出す。

ハヌマンラングールは，マカックよりおとなしくて，好奇心に乏しく，けんかも好きではない。しかし，自分の子どもに対しては大きな愛情を示す。〔注11〕

テングザル　*Nasalis larvatus*

テングザルはその特別な形の長い鼻によって，すぐ見分けることができる。若いものと雌の鼻は，先のほうがとがっているが，年とった雄の鼻は，ぶらぶらしてゾウの鼻のようだ。雄には頬袋（ほおぶくろ）がなく，鼻が上くちびるのようにたれ下がっている。その鼻のまん中あたりは厚くふくらみ，1本のかすかなしわが刻まれていて，鼻の先のほうは細くなっている。鼻孔は大きくて，ひろがっている。この非常に奇妙な鼻は，おそらくテングザルが鳴くときの共鳴箱の役目を果たすのであろう。

胴体はすらりとしていて，尾は長い。前肢は長くて，後肢とほとんど同じくらいの長さである。おとなの雄の全長は150センチ，そのうち尾は約80センチで，胴よりも長い。毛の色は明るい淡黄色である。

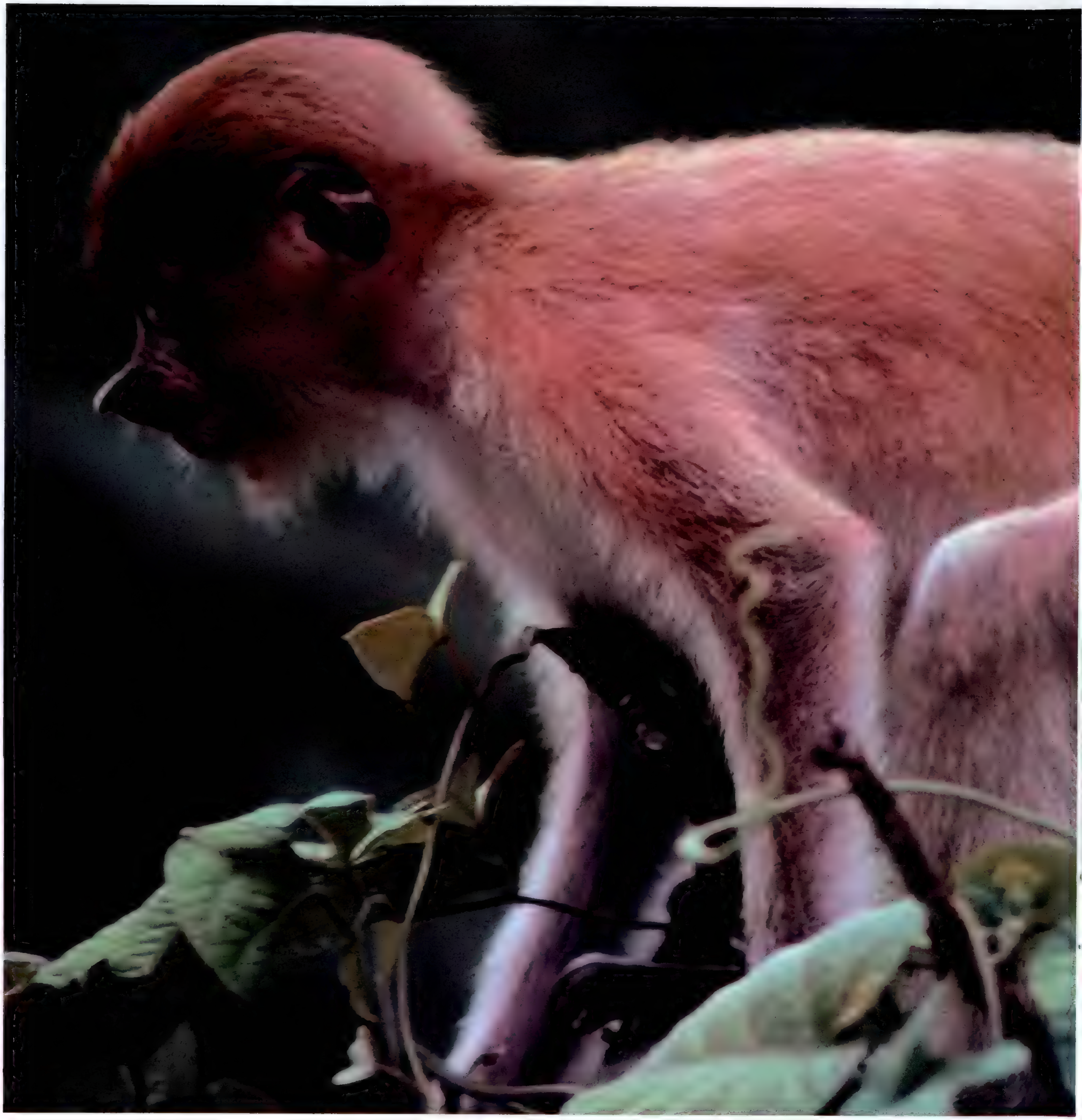
テングザルは，ボルネオで群れをつくって生活している。朝夕，木々や川の岸べにはテングザルが群がり，あたりは，よく響く叫び声でいっぱいになる。

テングザルの生活ぶりは，まだよくわかっていない。このサルを飼育するのは，きわめてむずかしいからである。かれらの生まれた島の，川のへりにしかはえていないある種の木々の芽，くだもの，葉だけを食べている。だから，そこへいって観察するよりほかには，このサルのことについては知ることができな

サバンナモンキー。
かれらは，アフリカのオナガザルのなかでも
広い地域に分布するサルに数えられる。
何ものも警戒してない，気を抜いた一瞬だ。
（5—10，11）　PH. JIPÉ



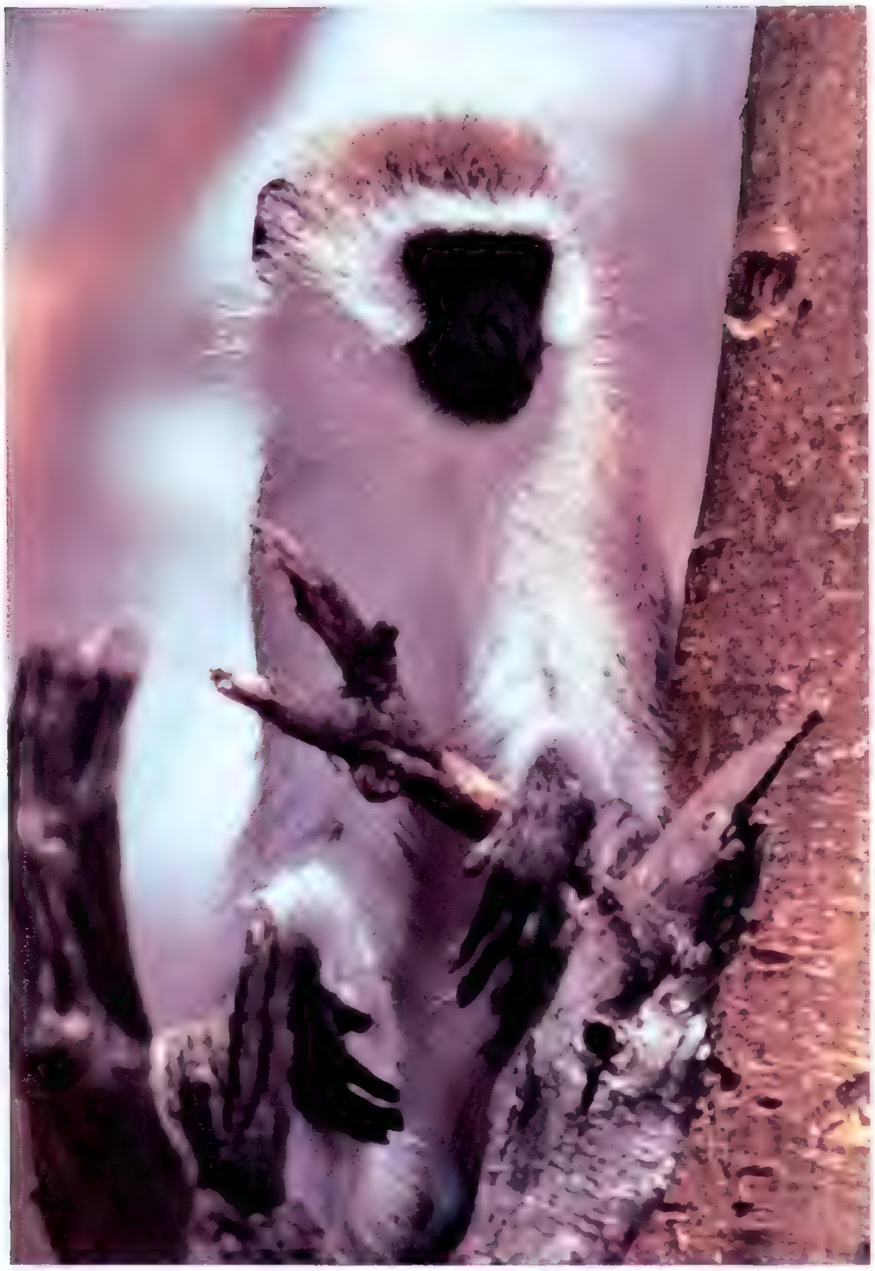
上から順に，シロクロコロブス，テングザル
ハヌマンラングールを描いたもの。
R.ライデッカー著「ローヤル・
ナチュラル・ヒストリー」（1893）より。
5－13

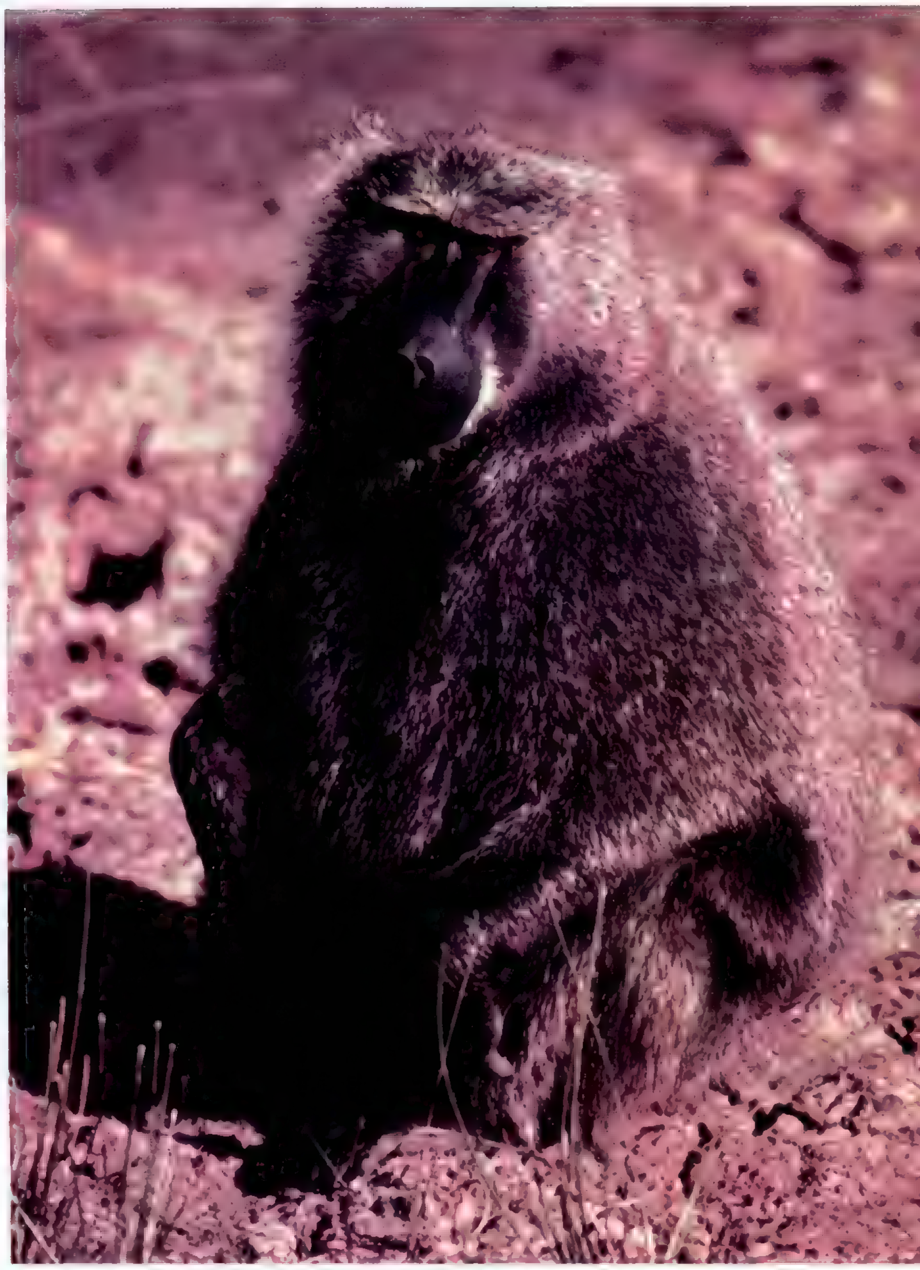


5−14

テングザル。
幼いころは
まだ、こんなかわいい鼻をしている。
動物園でかれらを見ることはむずかしい。
もし見ようとするならば
生息地のボルネオまでいかなければならない。

PH. J. KERN





い，ということになる。

かれらは，かなり動作の緩慢な，おとなしい動物である。よくかれらは，ぼんやりと食べ物をかみながら，人間たちを少しも気にしないで，低い枝の上に何時間もうずくまっていることがある。しかしかれらも，必要とあれば，敏しょうに巧妙に樹上を移動する。

かれらは，いつも暮らしている場所に近い川や海で，水浴びをするのが好きなようだ。漁師たちは，岸から遠く離れた沖で，テングザルたちが泳いでいるところを見つけたこともあったし，また，力つきておぼれ死にしそうになっていた１頭のテングザルを救いあげたこともあった。このときサルは，おとなしく船に引きあげられたが，漁師たちからできるだけ離れたところにうずくまっていた。船が岸に近づくのを待って水にとび込み，自分の力で岸に上がっていったという。

おとなになったテングザルの体長と体重は相当なものであり，攻撃されると，歯とつめでりっぱに身を守る。

その顔つきは，どちらかというと不快感を与えるが，性格は人好きのする穏和なものだといってよいだろう。

オナガザル属
Cercopithecus

アフリカのサハラ砂ばくの南部には，さまざまなサルがいる。もっとも大きなもの，もっとも知能の高いもの，もっとも醜いもの，もっとも美しいもの，そしてもっとも性質のよいものと，とりどりである。オナガザル属のサルは，動物園や動物愛好家のところで，ごくふつうに見かける動物だが，疑いもなくもっとも性質のよいサルである。

オナガザル属の特徴は，次のとおりである。ネコとほとんど同じくらいの大きさで，すらりとした姿をし，ほっそりとした肢（あし）と，長い親指のついた短くきゃしゃな手，先端にふさ毛のない長く細い尾をもち，大きな頬袋（ほおぶくろ）と臀部（でんぶ）にある非常に大きなたこ，これらを特徴としてあげることができる。毛色はふつう非常に鮮明で，ある種のものの色調はきわめて美しい。〔注12〕

かれらはもっとも活発で，社交的で，快活なサルたちである。家族的な単位で生活することはめったになく，群れをなして集まっているほうが好きだ。森のなかでその群れに出会うと，たいへんおもしろい。かれらは鳴い

左は，木の上にすむサバンナモンキー。
右は，地上や岩山にすむドクエラヒヒ。
左右のサルを，よく見くらべてください。
樹上生活をするサルは，ほっそりしており
地上にすむサルは，どっしりしている。
PH. J.BURTON et PH. S.TREVOR－A.DENIS PRODUCTIONS



たり，仲間で争ったり，木によじ登ったり，走ったり，なぐり合いやたたきっこをしたり，好奇心にかられてたえず興奮したりして，にぎやかに暮らしている。

こんな群れにも，人間社会の階層制を縮図にしたような身分ができている。群れでは，もっとも強いものの権利だけしか認められていない。リーダーは歯牙と腕力にかけて無理を押し通す。

しかし，とにかく見たところ，のんきそうな生活をしている。かれらは状況に応じて，うれしがったり，まじめになったりする。そしてどんな企てにも，熱意をこめて飛び込んでいくのだ。

まずいことには，どんな田畑でもかまわず荒らしまわる。だからかれらが，たとえナチュラリストたちにとって，どんなに魅力のある研究材料になろうとも，アフリカの農民た

サバンナモンキー。
バナナを食べているが
カメラマンが近づいてもいっこうに平気。
危険と感じたときには
すばやく，安全なかれらの世界
すなわち樹上に逃げる。 PH. ARMELLE KERNEIS-JACANA





ちから、憎みきらわれているのは無理もない。

略奪者として無敵のサル

アフリカのサルたちが、田畑さらに果樹園でたえまなしに略奪をはたらくので、多くの地方で、サルと戦うための組織をつくらなければならないほどである。

サルたちは、ほとんど何も恐れないから、かれらを退治するには、自然の武器、すなわちヒョウを使うしかなかった。適当な数のヒョウが生き残っていた間は、オナガザルやヒヒのふえるのをおさえていた。しかしまずいことに、２種の動物を戦わせて、たがいにけんせいさせようという考えは、そういつもうまくいくものではない。アフリカ各地で、あまりにも多くのヒョウをとるので――毛皮商人の利益のために――サルは、ほしいままに畑荒らしを続けているということになる。

野生のサルの場合でも、個々の行動は、われわれが動物園で見るのとほとんど変わらない。サルの群れが近づいてくると、木の葉のざわめきや、枯れた小枝の折れる音や、この動物特有の叫び声が聞こえるから、あらかじめわかる。群れは、進む方向をいったん決めてしまうと、長い行列をつくって、木から木へととびながら進んでいく。１頭、１頭、前にいるものがすでに先にとび移ったあとの、あいた枝へとびうつし、しかも枝の揺れがとまってからとび移るのだから、行列のなかの２頭の間にはかなりのあいまができるので、近づいて観察することができる。

この群れは、通常大家族的な集団であって、サルたちは経験豊かな年とった雄のさしずに従って生活している。《リーダー》は、いつも自分の身内のものの安全を心配している。群れが移動するときリーダーは、周囲がよく見えるいちばん高い場所に腰をすえている。危険なときは、身内のものに叫び声でそれを知らせるが、われわれにも、その叫び声がどんな意味なのかすぐわかる。夕方になるとサルの群れは、１本の木を選んでそこで夜を過ごす。寄り集まって眠りにつく前に、サルたちは、いちばん高い枝の上に気持ちよさそうに寝そべって、あたりのできごとにあいかわらず好奇心の強い目を配りながら、夕日を浴びておたがいに毛づくろいをする。

眠るときには、またになった枝の上に集まって、暖め合おうとしてからだをぴったり寄せ合う。われわれはよく森のなかで、こんなふうにして眠っているサルの群れに出会うことがある。

サルの群れは森のなかで長い生を過ごし、ほかの群れのことなど気にもかけないでいるが、もし同じ木の上で２つの群れが出会うと、そうはいかなくなる。こんなとき群れは、獲得物をめぐって激しい争いをするのだ。

オナガザルはときおり、その長い尾を枝に巻きつけて、からだをささえているが、南アメリカのサルの尾にあるような、ものをつかむ力はない。

タラポアンの母と子
アフリカのオナガザルのなかで
いちばん小さいサルである。
アンゴラからコンゴまでの地域にすむ。（左）

PH. R. VON NOSTRAND

ブラザモンキー。
おすまし屋だが、危険なときは
じっと身をひそめるか逃げるか。
その際にかれの発する音声は
たいへんメロディックである。（右）

PH. RUSS KINNE



ハヌマンラングール。
子サルは，心配そうにカメラを見ているが
インドでは，かれらは神聖なサルとして
敬われているので，人間によって
危害を加えられることはまずない。

PH. PHILIPPA SCOTT

オナガザルは水をこわがらない。それどころか泳ぐのがじょうずで，群れ全体が川や急流を泳ぎ渡るのを見かけるのは，そう珍しいことではない。

そればかりでなく，マングローブ林地帯では，浜べでカニや軟体動物を捜しているのを見ることもある。全身がとっぷり水につかるほどの深みにもはいっていく。

サルの大敵——サルクイワシ

オナガザルは野獣を恐れない。ときおりふいを突かれて，ヒョウにつかまることがあるが，ふつうは驚くほどの機敏さで，四つ足の食肉獣からのがれることができるのだ。ところがこれとは反対に，かれらは猛禽（もうきん）類を恐れる。この地方によく現われるサルクイワシ〔注13〕は，かれらにとってもっとも危険な敵である。

その名のとおりこのワシは，サルをさらうのである。このワシはサルを捕えようと，波の上を舞っているアホウドリのように，ゆっくり森の大きな木の上を飛んでいる。茂みのなかで，なにかざわめきでもすると，ワシはさっと襲いかかって，ただちに不運なサルをつめで捕えてしまう。

ワシのつめは非常に長くて鋭いので，小さなからだを貫いて突き刺さる。もちろんサルは，ありったけの力で枝にしがみつくが，激しい痛みのために，サルのからだは，すぐに枝から引き離されてしまう。他のサルが，仲間を助けに駆けつけることもあるが，恐ろしい猛禽類のくちばしとつめに対しては，手の出しようがないのである。

サルクイワシは，アマゾンの森林やアフリカ，アジアにいる。フィリピンにもその一種がいる。このワシの特徴は，頭の上の立てたり倒したりすることのできる冠毛である。

他の動物に愛情を求めたサル

野生のオナガザルの繁殖期は，ある季節だけに決まっているわけではない〔注14〕。だから，その群れのなかにはつねに多くのあかん坊がいる。捕獲されて飼われているオナガザルでも，人間が注意深く世話をすれば繁殖する。

動物学者でもある探検家が，数年間のアフリカ滞在中に研究したオナガザルについて，こう書いている。

「わたしはよく船旅をしたが，ある船旅の途中のできごとであった。アフリカ人たちが，捕えて間もない5頭のオナガザルを持ってきた。言い値が非常に安いので，わたしは即座に買いとった。旅の愉快な道連れになればと思ったからだ。だがそれは期待はずれだった。不幸な動物たちは，船の片すみにかたくなにすわって，おたがいに身を寄せ合い，両手の間に顔をうずめ，まるで恐ろしい思いにぼうぜんとしている人のようだった。食物は断固としてはねつけ，ときどき，いかにも自分たちの運命を悲しむかのようなうなり声を出すだけで，あとはじっとがまんしていた。

ある晩，わたしは妙な音を聞いたと思った。翌朝，はじめて，それがなんの音だったかがわかったのだが，4頭のオナガザルが姿を消していたのである。つないであったロープは，うまく結びめが解かれていた。けれども，ちょっと離れたところにいた5番めの仲間のことをすっかり忘れてしまって，ついにかれをどれいの境遇にとり残して逃げてしまったのである。

この逃げそこなった雄ザルに，わたしはココという名をつけてやった。かれは，自分がつながれているロープをほどこうと，いろいろやったけれども，とても逃げられるものではないという，悲しい悟りに達したのであった。翌朝からは，幾粒かのトウモロコシをもらうと，それを拒まずに食べ始めた。しかしこのサルは，攻撃的で乱暴な態度をむきだしにして，近よる人たちには見境なくかみついた。明らかに仲間がいないことが，かれにはつらかったのだ。やがてかれは，わたしたちが集めた別の動物たちに興味をもち始め，そ

して森で生けどりにされたサイチョウと親しくなった。

この鳥のやさしさが、たしかにサルの心をうったのだ。かれらの友情は、急速に、そして非常に深いものになっていった。しかしサルは、ときどき発作的にふきげんになって、友だちのサイチョウをめちゃくちゃにいじめることがあった。サイチョウは、じっと忍耐強くサルの気まぐれをがまんしていた。サイチョウもすすんで友だちのサルに近寄っていくが、サルのほうでもきげんのよいときには、おもしろがって羽虫をとってやるのだった。鳥のほうでも、その気持のよい遊びにすっかり慣れてしまって、サルの姿を少しでも見ると、すぐに羽毛をさか立てて歓迎の気持を表わし、サルがふざけ半分に鳥のくちばしや、足や、首を引っぱったりしても、決していやがりはしなかった。

サイチョウは、りちぎにオナガザルのそばにいて、サルのこぼす食べ物のくずを拾ったり、自分のほうからよくサルを遊びに誘ったりしていた。数か月の間ずっと、かれらは非常に仲がよかった。しかし、不幸なことにサイチョウが死んだ。ココは再びひとりぼっちになってしまって、また退屈し始めた。

そうこうするうちに、かれは親をなくした1頭の子ザルにめぐり会い、それに愛着を覚えた。その子ザルがいることに気がつくと、かれはいつも、気でも狂ったかのように喜んで、腕を大きくひろげて大歓迎するのだった。子ザルのほうも必ず大喜びで、その腕のなかにとびこんでいった。ココは親のないこのサルをしっかり胸に抱きしめて、やさしく愛撫し、それから子ザルの毛を熱心にきれいにしてやるのであった。

だれかがその子ザルを、かれから取りあげるようなふりをすると、必ず、だれに向かってでもおこりだした。もしほんとうに子ザルを取りあげてしまうと、かれはひどく悲しんだ。要するにかれは、自分の愛情にこたえてくれる子どもを見つけたのである。実際子ザルのほうでも、かれに対しては実に従順であり、珍しいくらい忠実であったのだから……。しかしココは、もう一度不運に見舞われた。この子ザルは数週間後に死んだのだ。ココはまったく絶望してしまった。かれは子ザルの死体を両腕に抱いて、いとしそうに愛撫してやり、胸の張り裂けるような悲痛な声を上げて鳴いたのだ。

おうへいで光るもの好き

おうへいなのもオナガザルの欠点の1つである。



その後わたしが飼っていたサルは、魅力もあり、人なつこいのだが、よく突然に攻撃性をむきだしにした。わたしの友人も、長いこと1頭のオナガザルを飼っていた。それはとてもよくかれになついていたが、それでも、結局最後まで自分のものにすることはできなかった。

主人と戯れながら、サルは、主人をバカにしてみせるばかりか、主人をおこらせて、自分を打つようにしむけるのだった。そんなにまでして、サルは主人のメンツをつぶそうとするのだった。

サルは盗みもした。とくにぴかぴか光るものはどうしても取りたがった。窓にさくがはまっていても、光るものを盗もうという気持をそぐことにはならなかった。友人は、船会社が事務所にしていた建物に住んでいた。1階は船会社の事務所で、経理課があり、事務所の窓には、厳重に格子(こうし)がはまっていた。ある日、サルのほおが妙にふくらんでいるのに気がついた。むりに口をこじあけてみると、右のほおからは2枚、反対側のほおからは3枚の貨幣が出てきた。サルは明らかにそれを、経理課からかすめてきたのだ。

オナガザル属のなかで、もっともよく知られている種類としては、サバンナモンキー、ダイアナモンキーとクチヒゲザルがある。これからそれらを詳しく研究していこう。

サバンナモンキー。
大木の上からあたりを見まわしている
2頭の雌と子ども。
PH. S. TREVOR-A. DENIS PRODUCTIONS



5-20

サバンナモンキー。
ほかのサルと同じように
幼いときに捕えれば、よくなれるが
年をとるにしたがって気むずかしくなる。
PH. F.BEL-G.VIENNE-JACANA

テナガザル研究とカーペンター博士

伊谷純一郎

1937年に、アメリカから1つの探検隊が、タイ国に向けて派遣された。エイシアティック・エクスペディション（アジア探検隊）と呼ばれるこの探検隊の隊長は、H.クーリッジであり、その隊員には、A.シュルツ，C.R.カーペンター，N.タッペンら、今日の霊長類研究を育てあげてきた代表的な人物が名を連ねている。そしてこの調査行こそは，霊長類研究の歴史に不朽の足跡を刻むことになったのである。

一夫一婦制を発見

カーペンターらは，タイ国の北部チアンマイの周辺で，シロテテナガザルを対象とする調査を行なった。個体識別に基づく生態調査はカーペンターが担当し，そのあと，この観察の対象になったテナガザルの多くは射殺して，シュルツとタッペンが比較形態学的な研究を進めるといった，今日の自然保護の常識からすれば，とうてい考えられないような徹底した調査であった。

この野外調査によってカーペンターは，テナガザルの集団が，例外なしに1頭の雄と1頭の雌，そして，せいぜい2，3頭の子どもをあわせた4，5頭からなっていることを見いだした。これらの集団は，その1つ1つが厳重ななわ張りをもっていて，隣接する集団の領地侵入に対しては，音声による猛攻を浴びせて，これを撃退する。とくに注目しなければならないのは，この集団のもつ一夫一婦という構成であって，この構成を維持していくためには，性的成熟に達した子どもは，雄も雌も，自分が生まれ育った集団を出ていかなければならないということである。

オナガザルの場合，土地との強い結びつきを保っているのは雌であって，群れを出て他の群れと交わる可能性をもつのは雄だけである。したがって，テナガザルのこのきりつめた社会構成は，類人猿段階にいたって見られる，“雌も集団を出ていく”ということによってはじめて可能な構成であるということができる。テナガザルの集団を人間の家族の原型と考える説があったが，今日ではこの説は支持を得ていない。

カーペンター研究の追試

カーペンターが，1930年代に行なったこの研究は，同じくアメリカのエレフソンによって，30年のちにマラヤにおいて追試された。実験室における研究とは異なり，野外研究の追試はきわめて困難とされるのであるが，エレフソンは，カーペンターの結果を全面的に支持したのである。「タイ国におけるシロテテナガザルの行動と社会関係に関する野外研究」（1940年）と題するカーペンターの論文からは，処女地をいくような慎重さと，30代前半の筆者の若々しい意欲を読みとることができる。



クラレンス
レイ
カーペンター博士
ジョージア大学
教授

撮影　水原洋城
日本
モンキーセンター

かれは，日本にも幾度かやってきた。高崎山で調査を行ない，このまれにみるニホンザルの大集団の保護について，いくつかの重要な意見を述べていった。その後もかれは，わたしたちがタンザニアの奥地で餌づけた野生のチンパンジーの保護と維持について，いろいろと気を配ってくれている。

テナガザルについて，もう1つつけ加えておきたいことがある。それは，日本にテナガザルについての代表的な研究者がいるということだ。上智大学のジャン・フリッシュ博士（最近帰化され北原隆と改名）で，とくにテナガザル属と，これに近縁な化石の歯についての，比較形態学的な研究を進めている。博士はまた，日本の霊長類の研究を，はじめてヨーロッパやアメリカに紹介した人でもある。■

カラーページ注

〔注1〕**テナガザル**　小型類人猿 lesser ape とも呼ばれ，現生種は7種に分けるのがふつうであるが，種内の形態の変異は大きい。テナガザルの先祖は，ヨーロッパの第三紀鮮新世および中新世の層から出土するプリオピテクス，さらにさかのぼって，エジプトのファイウムの漸新世の地層から出るエオロピテクスへとつながる，約4000万年の昔にまでたどることができると考えられている。大型類人猿とは，非常に古く分かれたことはまちがいない。

〔注2〕**喉頭嚢**　霊長類は一般に，喉頭（こうとう）部に開口する気嚢（きのう）をもっており，喉頭嚢と呼ばれているが，系統あるいは種によって開口位置や大きさなどに特性がある。大型類人猿ではそれがきわめて大きく，前胸部や腋の下にまでひろがるものがあり，テナガザルでは一般に発達が悪いが，フクロテナガザルだけが例外で，のどのところにふくれあがる大きな嚢をもっている。ヒトのそれは，退化して痕跡だけがある。この嚢の機能については諸説があるが，フクロテナガザルのものは，明らかに音声の共鳴の役を果たしている。

〔注3〕**子どもを水で洗う**　フクロテナガザルのそういう現象については，ほかに信頼のおける報告を見ない。

〔注4〕**シロテテナガザル**　日本では，もっともよく知られたテナガザルである。写真でも明らかなように，体色は白，黒，茶など，変異が多く，同じ集団のなかにも異なった体色の個体を見いだすことができる。

〔注5〕**頬袋**　オナガザル科のすべての種がもっているわけではない。マカックのような，地上生活をするものに，より発達した頬袋（ほおぶくろ）を見ることができる。

〔注6〕**尾**　一般に樹上生活をするものによく発達しており，地上性の強いものには退化の傾向が見られる。コロブス，オナガザルなどはすべて長い尾をもつが，マンドリル，ドリル，ニホンザル，ベニガオザル，ブタオザルなどの尾は短小であり，マゴット，ムーアモンキー，クロザルなどの尾は痕跡的である。英語のモンキー monkey は尾の長いサルを，エープ ape は類人猿のように尾がないか，あってもニホンザルのように短小なサルをさすことばである。

〔注7〕**ヒマラヤとチベット山中の種**　このサルは，おそらくハヌマンラングールの亜種，ヒマラヤンラングールであろう。雪男の正体の1つに想定された。霊長類の故郷は熱帯森林であると考えてよいが，ヒマラヤやチベットの例のほか，冬季零下20°Cにまで下がる積雪地帯に分布するニホンザル，アフリカの草原にすむパタスザル，エチオピアの半砂ばく状の環境に適応しているマントヒヒとゲラダヒヒなどを，霊長類の極限的な適応の例といってよいであろう。

〔注8〕**シロクロコロブスの毛皮**　写真説明でも，それとなく触れているが，アフリカの原住民の需要以上に，19世紀のヨーロッパ，アメリカの婦人のニューモードのために，このサルが絶滅にひんしたというのが実情である。今日では禁猟となっているが，いまだによくアフリカの町のみやげ物店などで，この毛皮を見かける。

〔注9〕**ハヌマンラングールと群れ**　これについては，京都大学の杉山幸丸博士や，アメリカのP.ジェイらの詳細な研究がある。ハヌマンラングールの多くの群れは，20頭足らずからなる単雄群（おとな雄1頭と雌，子どもたちからなる群れ）であるから，群れで生まれ育った雄は，成長すると群れを出ていかなければならない。群れを離れた雄たちは，雄ばかりからなる雄グループをつくる。

〔注10〕**ハヌマンラングールの群れどうしの争い**　杉山氏らの観察では，雌は争いに参加しないという。

〔注11〕**ハヌマンラングールの子に対する愛情**　杉山氏らは，ハヌマンラングールが，生まれて間もない赤ん坊を次々に他のサルに手渡したり，また，雄によって傷つけられた子どもを放置して死にいたらしめた，といった事件を多く観察している。ハヌマンラングールの母親の子どもに対する愛情が，死んだ子どもをさえ抱いて離さないニホンザルなどのマカック類にくらべて，より淡白であることを指摘している。

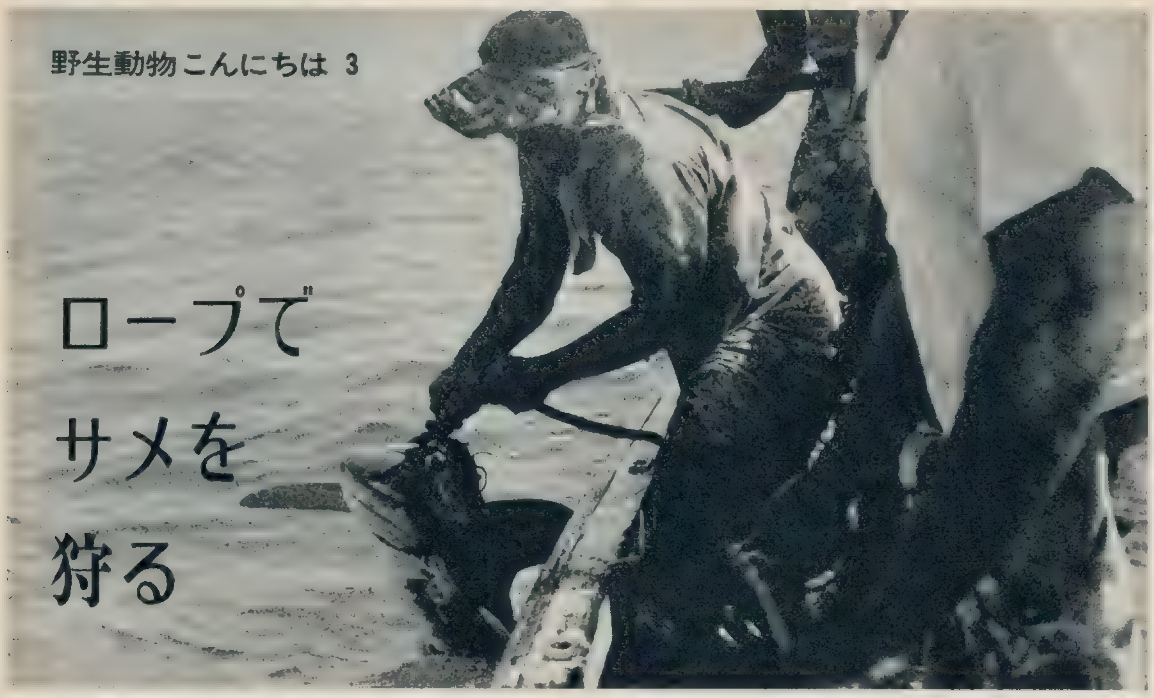
〔注12〕**オナガザル属のサルたち**　本文にもしるされているとおり，これらはもっとも美しい装いをもったサルたちであろう。十数種が知られており，そのほとんどが深い森林のなかで樹上生活をするが，サバンナモンキーとブルーモンキーだけが，森林の外に進出している。このグループのサルたちは，森林を中心とした適応放散の好例を示している。

〔注13〕**サルクイワシ**　アフリカ産のワシのなかで，とくにサルを好んで捕食しているのは，クラウンホークイーグルとマーティアルイーグルである。

〔注14〕**オナガザル属の繁殖期**　おそらく，この見解は正しいと思うが，さらに詳細な実地調査を必要とする。温帯に分布するもの，たとえばニホンザルでは，明確な交尾期（冬季の約3,4か月）がある。■　（伊谷純一郎）

野生動物こんにちは 3

ロープでサメを狩る



ロープの輪でサメの頭をひっかける

紺青の海にきらめく白い牙，ロープを引きしぼる若者の筋肉の躍動。歓声。そして吐息。頭上には輝く太陽。汗。気の遠くなるような空の青さ。

ロープ1本でサメを捕えるという。

これこそ野性の世界ではないだろうか。いってみよう，西サモアへ。そして南太平洋の野性のサメと人間の戦いを，この目で見てみよう。

6月の荒海へサメ舟を出す

南太平洋の数少ない独立国，西サモア共和国に着いたのは昨年の6月だった。

サモアは，メラネシアの島フィジーと隣り合っていて，ポリネシアの玄関口に当たるところから，ポリネシア人の民族移動のルートのなぞを解くのに重要な地点とされていた。

この島は他のポリネシアの島々，たとえばハワイ，タヒチ，ニュージーランドのように，ヨーロッパ文明との接触が，急激かつ徹底的ではなかったし，島民も昔ながらの生活をたいせつにする気風があるので，古いポリネシアの文化が，比較的よく保たれている所だ。

わたしたちが滞在した村は，首都アピアから，山を越えた反対側の海岸にある。わたしがはじめて村をたずね，サモア人の牧師さんに案内されて，サメ舟を見に浜べに降りていくと，

「今日の午後，サメとりに出るところだ」という。

牧師館で聞いた話では，5月は風が強くて，一度も漁に出られなかったということで，心配していたやさきであった。

わたしたちは，実に幸運だった。サメ漁はまったく風しだい，波しだいで，予定は立たない。その日も，風が強く波も高いのだが，キャプテンは「だんだん静まるはずだ」と，自信をもっていいきる。

サメ舟は7メートルほどのカッターで，サモア人はファウタンと呼んでいる。梶を取るのは，タウタイ（船長）の肩書きをもつ熟練した漁夫である。乗員のなかでも，サメの輪どりを実際に行なえるのはタウタイだけである。

村は前方200メートルぐらいのところで，サンゴ礁に取り囲まれていて，内側は礁湖（ラグーン）になっている。そのリーフをこぎでると，小さなサメ舟は，たちまち波に翻弄され始め，ときどき高い波の間に没して，姿も見えなくなる。かれらはこのちっぽけな舟で，外海，つまり太平洋に乗りだしていくのである。

サメの輪どり，つまり輪にしたロープでサメをひっかけ，輪をしめあげてつかまえる漁法は，現在ではわずかに西サモアとニューアイルランドの一部に残っているだけだが，昔は，南太平洋全域にあったようだ。バラキューダ（大カマス），メジマグロ，メカジキ，イルカ，イッカク（一角鯨）などにも適用されていた。

歯が鋭くて，どんなじょうぶな釣糸さえも食いちぎる種類の魚や，針にかかってから取り押えるまで，人間のほうが参ってしまうような，力の強い手合いに用いたようだ。

午前3時から準備を始める

さて，わたしたちは，サモアの村の〝サメとり組〟に頼み込んで，同行させてもらうことにした。

わたしたちの心配の種は，かれらが主として，夜，漁を行なうことだった。通常，サメ舟は午後4時ごろに村を出て，翌日の昼ごろ帰ってくる。

かれらは，昼間はバナナ畑やタロイモ畑で働き，夕方から漁にいくという，たいへんな働き者なのである。

わたしたちは，サメの姿をフィルムに写すため，昼間，漁に出てもらうよう頼んだ。お礼には，毎回のえさのブタ肉を提供することになった。

出漁の日，漁師たちは，午前3時過ぎから準備を始めた。かれらは，えさと弁当の用意をするのだ。あたりはまっくらで，南十字星は中天に真横になって寝ている。バナナの葉にきっちり包まれたえさのブタ肉と，弁当のタロイモを，地面に掘った穴に入れ，上から焼いた石をのせて，蒸し焼きにする。ブタ肉は，じゅうぶんに肉汁をふくんだままの理想的なえさになる。

えさのブタ肉およびマグロ・フレークのかんづめ，弁当のタロイモ，飲用のヤシの実，サメを呼ぶ道具のガラガラ，サメを捕える輪，サメをなぐる棍棒，舟のアカ汲み，マストとセイル，これだけが出漁の一式である。かれらは，舟を浜に出し，明るくなるのを待つ。なぜなら，沖合いのリーフには，非常に狭い通路が1つあるだけで，有視界航行しかできないからである。



サメの陸あげ

6時半過ぎ，リーフを出て，島沿いにひたすらにこぐ。乗員は総勢15人で，このうちタウタイは3人いる。出発から3時間ほどで漁場に着き，帆を降ろして，うねりのままに舟を任せた。

舟端から，一方向に3本のえさを流す。まん中の1本には，木の浮きをつけ，およそ15メートルの位置に，両端のえさは，5メートルくらいの距離である。

そして舟べりでは，水中にブタの内臓をしぼったり，日本製のマグロ・フレークのかんづめに，数か所穴をあけて水中で振る。マグロの肉は細かく溶けて水中に沈んでいく。

ニュージーランドの民族学者，ヒーター・バックの著書によれば，サモアの〝サメの輪どり〟には3種のえさがあったという。遠くのサメをひきつけるフローティング・ベイト，深い水中のサメを呼ぶディーフ・ベイト，近づいたサメを輪のほうに誘導するニアー・ベイトである。ここでは，中央の木製の浮きが，遠くのサメの誘致，マグロ・フレークが深いサメの誘致，両端の短いえさが誘導用ということになる。

ついに捕える！

一方，2人の若者が，サメを呼ぶガラガラを水中で振り始める。サモアのガラガラは，木の棒に，2つに割ったやしの殻，ちょうど，半円型のおわんのような型のものを通してある。しかし貝殻を使っている地域もあり，要するに音が出ればなんでもいいわけだ。

この音はちょうど，小魚が群がって回遊する音に似ていて，遠くで，この音を聞きつけた（というより，振動を感じて）近づいたサメは，えさのにおいにつられ，ついには舟ばた近くに誘い込まれて，お縄ちょうだいという寸法になる。

だが，大波のうねりと，ペンキのにおいに当てられたわたしは，船尾にひっくり返って目をつぶっていた。

どれくらい時間がたったろうか。

「サウ・マリエ（サメが来た）！」の叫びにガバと身を起こす。「レアイ・メレレ（ちがう，メレレだ）」とタウタイが訂正した。

そばの水面下を，薄黒い影が通り過ぎていく。見張りとガラガラ振りを残して，再び全員天を仰いでひっくり返る。

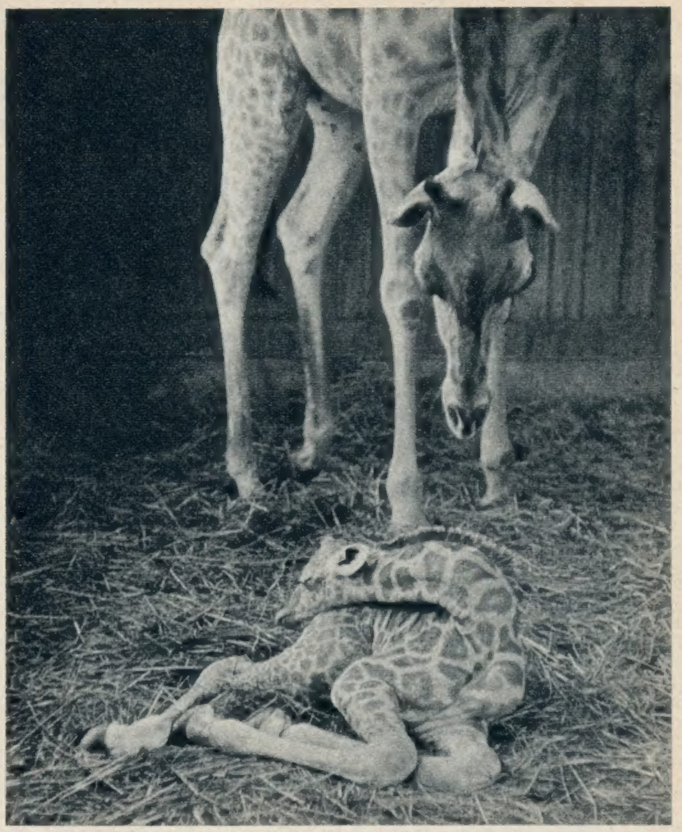
うとうとしかかったとき，再び「サウ・マリエ！」である。

今度は本物だ。大きな背びれが，左舷近くの水を切っていく。そのまま，まっすぐ舟に近づき，あっという間にロープにひっかかってしまった。水しぶきひとつあがらない。

後ろにすわっていた，ほおにこぶのあるタウタイは，わたしを押しのけて立ちはだかり，

動物園のミッドナイト

小森　厚



母親に
見守られて眠る
キリンの赤ちゃん
（多摩動物公園）

見張り役を立てる

〝眠る〟というのは，脳――とくに大脳の休息を意味しているから，一般には脳の大きな動物ほど〝眠り〟が必要であって，からだのわりに脳の小さな動物は，眠りの時間が少ないか，または，きわめて浅いものが多い。

キリンの脳はあまり大きくないから，あまり眠りを必要としない。そのうえかなり用心深い動物なので，飼っていても，なかなか熟睡した姿を見る機会に恵まれない。

しかし，赤ん坊のときは，よく熟睡した姿を観察できる。地面にすわり，首を後ろにまわし，頭を腰のあたりにうずめるようにのせて，眠るのである。ところが，おとなになると，すわる姿勢まではよく見られるが，首を後ろにまわしているのはなかなか見られない。わずかな物音や人のけはいにも気がついて，さっと，首を伸ばしてしまう。

多摩動物園では，キリンがよくふえ，10頭あまりがいっしょにいる。このように，たくさんのキリンがいっしょに夜を過ごすばあいは，群れのなかの2，3頭は必ず立って警戒に当たり，残りのものはすわって休んでいる。仲間の見張り役があるときは，安心できるためか，なかには1，2頭首を後ろに曲げて眠っているのを見かけることがある。ことに，動物園生まれの若いキリンは大胆で，このような寝姿をときどき見せてくれる。

ゾウは朝寝坊

ゾウはからだも大きいが，脳も大きな動物で，したがって眠りもたくさん必要だと考えられる。あの大きなからだを，草とわらで養っているため，大量のえさが必要である。大量を食べるには，長い時間がかかる。動物園では，夕方，寝部屋に入れてから1日分のえさを与える。するとゾウは，すっかり平らげるのに夜遅くまで起きていて，ばさばさ，ぽりぽり，鼻や口を動かしている。そのためか，意外に朝寝坊で，朝日がかなりのぼるころまでグウグウ寝ていることがある。

寝姿は，あの4トンもある巨体を横たえながら，いつでも立ちあがれるようにと，からだの上側にある足，すなわち，左を下にして寝た場合は，右側の前後の足を，立てひざの状態にしたままである。物音に気がつくと，あの巨体からは予想もできない早わざで，さっと起きあがる。また，寝ているときは，急所である鼻は内側にだいじに巻き込んでいる。

強いほど悪い寝相

ラクダの首もかなり長いので，寝るときはキリンのように，ときには首を後ろにまわしていることもあるが，首を前に伸ばし地面にべったりとつけて寝ていることが多い。さらにからだを完全に横たえ，4本の足をぶ用心にだらりと投げだしていることもある。ことに夏の暑い日には，昼間でもこのような格好で寝ているので，よくお客さんが，病気で死にそうになっていると勘違いすることがある。

ふつう，どの動物でも暑い夏は，寝相が悪い。冬はからだを縮めて体温をのがさないようにするが，夏は体表面をできるだけ大きく空中にさらすため，いわゆる大の字になって寝るのである。ライオンやクマなどは，自分の力に自信があるので，あきれるぐらい行儀が悪く，大の字になって眠っている。

寝袋を使う類人猿

チンパンジー，ゴリラ，オランウータンといった類人猿は，野生のとき，手近にある木の枝などを引き寄せて，一夜だけのベッドをつくって寝るのである。動物園に飼っているオランウータンやチンパンジーの子どもなどを，雑木林に連れていって放すと，さかんに枝を自分のからだのまわりに引き寄せて，寝ごこちのよいベッドをつくろうとする。

ふつうのサルは，しゃがんだ姿勢やすわったままで眠る。ところが，類人猿は，ごろりとからだを横にして寝るが，横になるとどうも大きな頭の安定がよくないので，長い手でひじまくらをする。これは類人猿の特徴の1つである。人間なら，右を下にすれば右の腕をまくらにするが，手の長いチンパンジーは，反対側の手をぐるりとまわして，頭の下に敷き込むのである。

寒いときには，麻袋を与えてやると，これを寝袋にしてもぐり込む。チンパンジーは，あまり寒くないときには，与えられた麻袋を下に敷いて寝ることもあるが，たいていは袋にもぐり込むことを覚えてしまう。若いオランウータンのなかには，天井のこうしに巧みに麻袋をからませ，これをハンモックにするものもいる。そんなところにも，類人猿の道具の使いはじめといった状態がみられる。

このことを伝え聞いてか，多摩動物公園にこの冬のはじめから「おサルさんに使ってください」と書いて，毎月5,6枚の麻袋を小包にして送ってくれる人がある。おかげさまで，多摩動物公園のオランウータンもチンパンジーもあたたかく冬を過ごすことができた。紙面をかりて，お礼を申し上げます。■

（多摩動物公園飼育課）

「マヌー，マヌー（殺せ！）」と興奮して叫んでいる。姿は見えないが，サメをなぐる，〝ドスン，ドスン〟という音が聞こえてくる。妙に空虚な音である。12,3回も脳天をなぐって失神させ，舳の間に，棒を押しこんで舟に引き揚げる。このときの獲物はヨシキリザメで2メートル以上もあった。これがあばれたら，3人乗りぐらいのカヌーなら転覆させることもあるという。

今日のような幸運は例外で，たいていは，サメは大あばれして，抵抗するという。それでも熟練したタウタイは力で押えることをせず，サメの動きに合わせて，実にうまくロープを絞るのだ。

わたしたちの見たところでは，サメを近くまで誘導しておいて，キンギョすくいの要領で，すくいあげながら輪をかぶせるようだった。

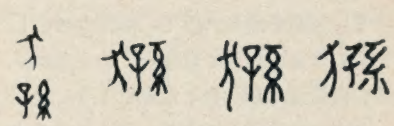
輪をかけそこなって逃げられるのもある。サメの影すら見えない日もある。1日に6匹もとれたこともあるが，2か月あまり待ち抜いて出漁回数11回，漁獲のあったのは4回，総数12匹とは，まことに効率の悪い漁であった。

しかし，自然な採集とは，そんなものであり，人間が効率を上げようと努力した瞬間から，その生物は絶滅への道を歩み始めるのかもしれない。■

（日本テレビ・ディレクター・市岡康子）

漢字のふるさと　3

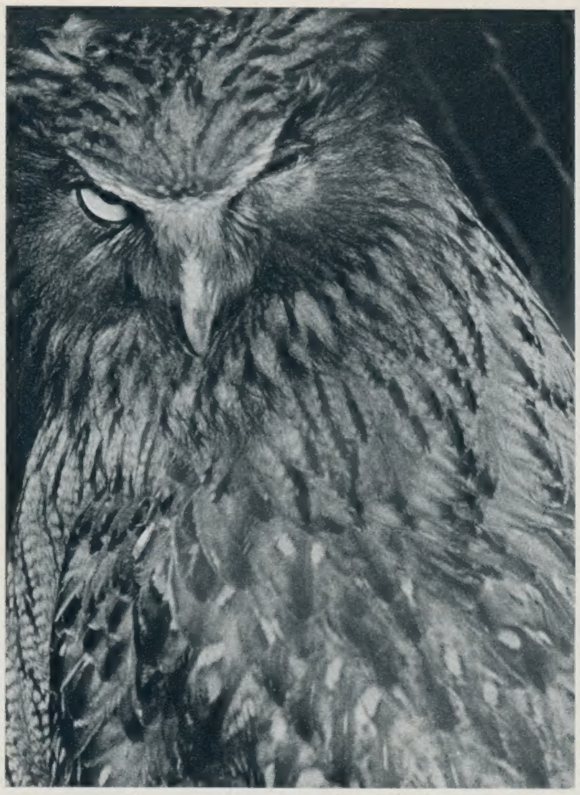
藤堂明保



猻（そん）　もと小型のサルのことだが，「猿」とともにサルの総称として用いる。また日本で北方産のものを「エゾマツ」「エゾギク」などと呼ぶように，中国では西北地方のものには「胡」をつけて呼ぶので，猢猻（こそん）といってサルを総称することもある。

「孫」とは，「小さい子ども＋細い糸」を合わせて，細小なものを表わした字である。マゴは小さいから「孫」といい，他人に遠慮して小さくなるのが謙遜（けんそん）の「遜」である。

人間にいちばん似ている動物といえばサルだが，サルは人間より小さい。いわば小型の人間であるので「猻」と呼んだ。三蔵法師を助けて大活躍をするおサルの行者を「孫悟空」と呼ぶのはご承知のとおりである。サルにもし姓を与えるなら「孫さん」となるわけだ。つまりサルに対する愛称なのである。■



田中光常

動物写真のポイント

5. 目

動物の目がすべてのポイント

シマフクロウ
（上野動物園）

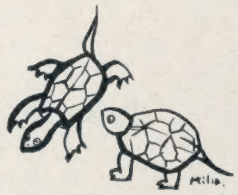
35ミリカメラ
レンズ 100ミリ
フィルム SSS
F5.6 X接点
ストロボ1燈

人間だって動物だって同じこと。目は心の窓とか，目がものをいうなどといわれるとおり，目は動物写真の一大ポイントになる。目の輝き，目の方向などが，その写真のよしあし，あるいは生きるか死ぬかのすべてを決定づける，といってもおおげさではなさそうだ。必ずしも2つの目というわけではなく，1つの目でもさしつかえない。1つだからこそかえって強いときも，おもしろいときもある。後ろ向きで，目が画面に写っていなくても，鋭い目を感じさせるようならば，なおさら結構な写真だと思う。

とくに2匹の場合には，おたがいの関連を物語っている目が，不可欠な要素となる場合が多いようだ。

生きている目，話しかけてくる目，意味のある目をとらえるには，写すほうの目も光り輝いていなければならないことは，当然といえるだろう。■

ペット相談室



担当

杉浦 宏

（上野動物園水族館飼育係長）

〈問〉 冬眠しているカメは，いつごろさめるのですか。（群馬県・多田登美子）

〈答〉 去年の秋から土のなかにもぐって冬眠したイシカタやクサカタは，春暖かくなると目をさまします。

冬眠からさめる時期は，日本のように南北に長い国では場所によってかなり差がありますし，その年によって気候が違うのでひと言ではいえません。

しかし，目安としては，春のお彼岸のころと思っていればまちがいないでしょう。

また，日本のカメは冬眠をしますが，外国産，とくに熱帯産のカメは冬眠しませんから，冬の間は保温が必要です。

陸生ガメも水生ガメも，甲ら干しのための太陽の光線が不足しますから，100ワットぐらいの赤外線ランプをつけてやるとよいでしょう。水生ガメには，熱帯魚用の自動温度調節器を用いると便利です。■

〈問〉 家で飼っているカメは近ごろでは，夏にくらべるとえさを食べる量が少なくなったようです。なにか病気でしょうか。（東京都・山中正三）

〈答〉 カメはヘビやトカゲなどと同じ爬虫（はちゅう）類です。

鳥類や哺乳（ほにゅう）類は，温血動物あるいは定温動物ですが，爬虫類，両生類，魚類は冷血動物または変温動物だということはご存じでしょう。

ですから，カメはまわりの気温や水温が下がると体温も下がり，からだの新陳代謝が不活発になります。3月，4月はまだまだカメにとって適温というわけにはいきません。

したがって，食欲も本格的ではありません。カメの適温は25°～30°Cですが，えさは，陸生ガメにはバナナ，リンゴ，レタス，サツマイモ，キャベツなどを，水生ガメにはイトミミズ，アカボウフラ，魚肉，貝の身などを与えるのがよいでしょう。■

〈問〉 冬眠からさめたカメの目が白くなっていて，開かないのですが，どうしたらなおるでしょうか。（東京都・権藤一美）

〈答〉 この病気は，冬眠のあとや，家の中で日光が当たらないところで飼っているとよく起こります。

ハーダー氏腺炎と呼ばれる眼病です。治療法は，乳児用の総合ビタミン液を1日2回，カメの口を竹べらのようなもので開き，1,2滴ずつ飲ませてやってください。1週間から10日も続けると，完全になおってしまうでしょう。

適当な日光浴，飼育している水槽の水をいつもきれいに保ってやること，などが予防法といえます。好物の小魚などをじゅうぶんに与えることは，健康を維持することにつながります。■

仲間のひろば

孫の成長の助けに

「世界動物百科」を見て，うれしく思った。人間のどんらんな欲望によって，破壊され荒廃する自然と生物。訴える手段をもたないかれらは，やがて人間のために絶滅するだろう。われわれの身辺にも，その例はたくさんある。

この動物百科は，その生態を伝えてくれるから，まことに喜ばしい。なかにはすでに写真を残すのみで，本体は滅亡したものもあるかもしれない。そうなればこれは貴重な刊行物となるだろう。

わたしにも孫ができた。まことにかわいいこの孫のために，1部申し込んだ。週刊といい，定価といい手ごろである。わたしの余命は予測できなくても，190余週は生きたいものである。世の片すみに生きているわたしには，孫のために残してやれるなにものもない，と嘆いていたときだけに，よけいにうれしい。

この刊行が完了するころには，いたずら盛りになるであろうが，この百科が少しでも幼いものの成長の助けになれば幸いである。孫に1つの本箱が贈れる，この企画に感謝する。（防府市・徳本亀一・64歳・無職）

▶人間と動物たちは，この地上に生命が存在するかぎり，もっとも親しい隣人であり，仲間でありたい……という願いのもとに，この百科は編集されていきます。あなたのお孫さんにとっても，きっとよい心の友となることでしょう。■

動物園だより

▷**おびひろ動物園**◁ 雪がまだ残るこの動物園は，温帯動物の耐寒訓練中。4月下旬までは閉園期間。

▷**札幌・円山動物園**◁ 各種の暖房器具を使い，北国でもここは公開中。町のばい煙を洗いおとすため，新しく動物の温水プールを設置。

▷**上野動物園**◁ 園内改造計画の一環として，トラの家，小動物の家を新築。子ども動物園では，ヤギの子がたくさん生まれるとのこと。アメリカラクダの子も大きくなり園内を散歩中。

▷**多摩動物公園**◁ 4月11日まで春祭り。チンパンジーの芸の進級式，動物の命名式など。4月中の日曜に「昆虫のはなしと映画の会」を開催。

▷**横浜・野毛山動物園**◁ 開園20周年を記念して，4月中旬に動物園史を展示。

▷**静岡・日本平動物園**◁ 4月18日まで春の動物園祭り。写生大会，写真コンクールなど。

▷**名古屋・東山動物園**◁ 恒例の春の公園祭りを5月9日まで。世界動物園写真展，子ども写真教室，動物写生大会，ねんど動物コンクールなど。

▷**和歌山・みさき動物園**◁ 「未来を開く大海洋博」 5月31日まで。
自然動物園に，モノレールが開通。

▷**福岡市動物園**◁ 「花祭り子ども大会」4月4日開催。死んだ動物の供養，人形劇など。

□ 原稿募集 □

☆読者の研究 ☆動物ニュース ☆仲間のひろば ☆ペット相談室 ☆動物写真 □400字詰原稿用紙2枚以内 □住所，氏名，年齢，職業，電話を記入 □採用分には薄謝または記念品を進呈 □送り先 東京都千代田区有楽町2-3 〒100 朝日新聞東京本社「世界動物百科」編集部『私たちの仲間』係 □原稿，写真などは，お返ししません。

裏表紙説明

セールフィンモリ Sail-finmolly （帆形のひれをもったモリの意）という名のとおり，背びれが帆を張ったように広い。この写真は雄で，雌の背びれはもう少し小さい。日本のメダカよりもグッピーに近く，胎生メダカ類の一員で，雄にはごらんのように腹に交尾器がある。原産が中央アメリカ，ユカタン半島の沿岸域や河口のものと，北アメリカ東南部からメキシコへかけての海に近い川のものと2つある。食物は植物性のものである。

モリというのは属名の *Mollienesia*（モリエネシア）を短縮した愛称で，この属には観賞魚として親しまれているものが，セールフィンモリのほかにも幾種かある。■ （農林省水産研・阿部宗明）

PH. RIVES

ギャラリー

老猿図

東洋の絵で，猿を描いたものはずいぶん多いが，現存の代表的な名品を挙げるとすると，水墨画では牧谿の三幅対のなかの猿猴図（大徳寺），著色画ではこの伝毛松筆の老猿図ということになろう。いずれも中国の南宋時代の傑作で，ともに日本に伝えられている。

本図は，元亀元年（1570）3月22日に曼殊院准三后覚恕法親王が天台の座主に就任したのを祝って，武田信玄が贈ったものであったことが，付属している信玄自筆の寄進状にしるされている。信玄がどのようにして，この名画を手に入れたかは不明だが，戦国の武将には美を解する人が少なくなかった一例である。終戦後，曼殊院から某家へ出て，最近，国に買い上げられた。

毛松は，12世紀中頃の中国の画家で，日本では室町時代に，かれの猿の絵が渡来していた記録はあるけれども，この図がそれかどうかはわからず，またこれを毛松筆と断定できる確かな証拠もない。それはともかくとして，この老猿図はまことに比類ない迫真力を示す。南宋院体画の精密な写実描法による動物画というよりは，犯しがたい威厳と，沈みこむような憂愁を漂わせた，一種の宗教的絵画といいたいほどの品格の高さを持っている。顔に塗られた朱も，表情のきびしさと相まって，深い感銘を与える。猿は滑稽な動物とさげすまれるのがつねだが，この絵はなまなかの人間以上の精神的魅力を感じさせる。■（水尾比呂志）



老猿図　伝毛松筆　　東京国立博物館蔵　　　絹本著色　掛軸　46.9×36.7センチ

世界動物百科　通巻5号　昭和46年4月11日発行（毎日曜日発行）　編集・発行人　大田信男　発行所　朝日新聞社　東京　大阪　北九州　名古屋　印刷・凸版印刷　**定価220円**



雑誌コード　0632